

2021年5月6日

みずほディーラーズアイ (2021年5月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 107.00 ~ 111.00

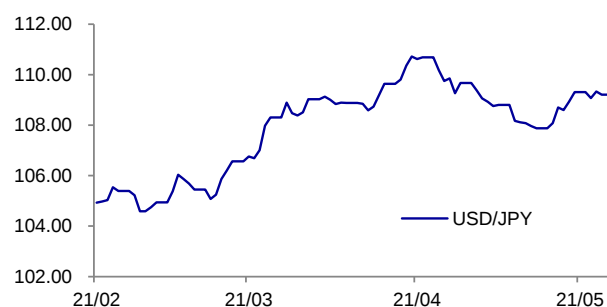
市場営業部 為替営業第一チーム 上野 智久

■ 先月の為替相場

先月のドル/円相場は軟調な推移となった。月初1日、110円台後半でオープンしたドル/円は、序盤に月高値である110.85円を付けるも、その後は上値迫いとはならず。2日（イースター）、米3月雇用統計は良好な結果となるも上昇は110円台後半まで。110円台後半での上値の重さが再び確認されると、米金利が低下する動きもあり翌5日にかけて109円台後半まで下落。6日、7日は大きな動きなく推移。8日は米失業保険申請件数が市場予想比悪化、米金利が低下する動きにドル/円は109円ちょうどをつける局面も見られた。9日は米3月PPIが市場予想を上回る結果にインフレ加速への警戒感が強まると米金利が上昇し109円台後半まで上昇。しかし節目の110円手前で失速。週明け12日以降、2週間ほどドル/円の軟調な推移は継続。12日は109円台前半までじり安。13日は米国製の新型コロナワクチンの接種による副作用が確認されたことでリスクオフムードが高まり109円付近まで軟化。14日も欧州通貨や資源国通貨に対するドル売りの流れから、109円を挟んだ上値の重い値動きに。15日、米3月小売売上高などの良好な経済指標が発表されるも、米金利の大きく低下したこととドル/円は一時108円台半ばまで下落。16日は、本邦実需の買いフローから一時109円に迫る水準まで上昇するも節目を前に失速。19日は日米首脳会談を経た台湾を巡る米中対立懸念などからリスクセンチメントが悪化。ドル売りの展開から108円近辺まで続落。20日は、本邦輸入勢のドル買いやクロス円の上昇から108円台半ばまで小反発。しかし、21日に日本の一部地域で緊急事態宣言が発令される見込みとなり、日経平均株価が大幅に下落する動きに108円割れ。さらに、インド等での新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、リスク回避の動きから円買いが強まる展開に。22日にはバイデン米大統領が富裕層を対象としたキャピタルゲイン税導入案との報道がされると、米株が下げ幅を拡大。23日には、一時107.48円と3月4日以来の安値(月安値)を付けた。しかし、その後は反転。26日は、米3月新築住宅販売件数が市場予想を上回る結果にドル円は108円台を回復。翌27日の日銀は無風通過も、米金利が上昇する動きに108円台後半まで続伸。28日には一時109円台まで上昇。FOMCでは政策の現状維持が決定。パウエル議長講演でハト派な発言が確認されると108円台半ばまで軟化。東京休場の29日は、序盤は前日からのドル売りの流れが継続するも、米金利が上昇する動きに徐々に買い戻し優勢。30日は終盤にドル買いが強まり109円台前半まで上昇、同水準で取引を終えている。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 今月の見通し

5月のドル/円は底堅い展開を予想する。

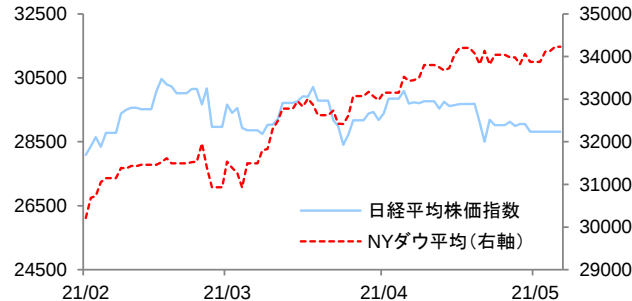
前述の4月の相場推移でも記載しているが、金融市場において新型コロナ関連の報道に対する感応度が比較的高い状況が続いている。先進国などでのワクチン接種の急拡大、そして今後日本やその他地域においてもワクチン接種が広がっていくであろうことは楽観材料。一方で、インドやトルコでは感染が急拡大やロックダウンの実施されている状況。ワクチン接種が進んでいる欧州でも終息の見通しは立っていない。加えて、感染力の強い変異種の市中感染拡大や、更なる変異種の発生などの制御しきれないリスクを内包していることが悲観材料。いずれにせよ、足元の状況ではセンチメントが一気にどちらかの振れるというのは想定しづらい状況という認識である。

米経済に目を移すと、米第1QGDPは前期比6.4%増と経済の急回復が確認できる。現状、市場とFRBの間ではテーバリングや利上げの時期についてギャップが見られる(緩和縮小において市場がFRBよりも早い時期を想定)。然しながら、4/28のFOMCで緩和的な金融政策の継続を示され、併せてパウエル議長は会見で“物価上昇は一時的”という旨の発言を複数回行っていたことに鑑みると、FRBは足元の経済の急回復が金融政策・財政出動という“ゲタ”を履いており、そして実体経済の自力は市場が思うほど楽観できる状況ではないと考えているのかもしれない。5月にFOMCが予定されていらず、政策変更の転換点が見られない状況においては、市場とFRBのギャップが調整される材料もあまりないように思う。

コロナ、並びに米経済の動向を踏まえると、5月のドル/円については明確な転換点はなく、基本的には米金利の動きや株式市場の動きを受けて副次的な動きが続くと考えている。その中でドル/円のトレンドに言及するとすれば、米経済のしっかりとした足取りが確認されている状況、そしてワクチン普及・接種が進んでいる状況を踏まえると、どちらかといえばドル円は小確りとした推移になるのではないかと。

■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/1	ISM製造業景況指数	3月	61.5	64.7	60.8
4/2	非農業部門雇用者数変化	3月	660k	916k	468k
4/2	失業率	3月	6.0%	6.0%	6.2%
4/5	ISM非製造業景況指数	3月	59.0	63.7	55.3
4/15	小売売上高速報(前月比)	3月	5.8%	9.8%	-2.9%
4/15	NY連銀製造業景況指数	4月	20.0	26.3	17.4
4/15	鉱工業生産(前月比)	3月	2.5%	1.4%	-2.6%
4/29	FOMC政策金利		0.00-0.25%	0.00-0.25%	0.00-0.25%
4/29	GDP(年率/前期比)	1Q	6.7%	6.4%	4.3%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル/円 見通しまとめ

ブル	17名	111.00 ～ 107.50	ベア	4名	110.00 ～ 107.00
----	-----	-----------------------	----	----	-----------------------

※ レンジは中心値

田中	ブル	111.00 ～ 107.00	米国でのワクチン接種が進む中、財政と金融両政策での支援姿勢は当面変わらず。ドル円は米金利動向を伺いながらもリスクオン地合いに円売りが優勢か。
竹内	ブル	110.50 ～ 107.50	4月の調整局面は一巡と見る。米GDPをはじめ、グローバルに経済指標の持ち直しや期待感を織り込み、リスク資産全般に底堅い相場展開を想定。
筒井	ブル	112.00 ～ 107.50	米貿易赤字拡大を見込んだドル安シナリオも想定されるが、FEDテーパリング期待がより大きなテーマとなる。更に下旬には米国防総省の対中政策レビューが完了し、その政策が明らかになれば金利・為替市場はドル高で反応する展開を予想。
加藤	ベア	110.50 ～ 107.00	依然として調整局面が継続し、日米金利差が明確に為替相場にリンクする状況に回帰するまではドルの下値トライが何度か来ると思うものの、「Sell in May」をこなせば徐々に下値を固めていくことになる。
山岸	ベア	110.00 ～ 107.00	FRBは完全雇用に近いまで緩和継続を示し、また増税見通しもあり、米金利とドル円の上昇余地は乏しい。米国で先行したワクチン接種拡大は一服、米景気はピークアウト近いとの見方もあり、ドル買いの材料としては織り込み済みか。
牛島	ブル	110.00 ～ 107.00	足元の米経済指標は強めのものが多い。NYでは7月に経済活動の再開方針を示しており、ワクチン接種も他の先進国対比で進んでいる。4月の調整局面が一巡した中、本来の米金利高&ドル高に回帰すると見る。
田坂	ブル	110.50 ～ 107.50	4月FOMCでは景気判断が上方修正され、米2Qも堅調な景気が予想されるが、テーパリング議論開始へのシグナルは出なかったことから、6月FOMCまでは堅調な株価を背景に、ドル円はレンジ内で底堅く推移しよう。
尾身	ベア	110.00 ～ 106.00	ドル売りの流れは継続していると考えている。背景は、低金利政策の継続、財政拡張政策、世界的な通貨安選好の流れ。但し、米長期金利の上昇や株価下落によるリスクオフなどが、ドル買いを起こしておりスピードは緩やかだろう。
上野	ブル	111.00 ～ 107.00	前頁に記載の通り。米経済指標は概ね良好な結果が続いており、現状の金融政策・財政政策が続く前提であればドル円は小確りとした推移が続くのではないかと。
山口	ブル	111.00 ～ 107.00	雇用関連指標をはじめ米国の経済指標は景気回復を示している。ワクチン接種も予想より早いスピードで進んでおり、ドル買いの流れの継続を予想。ただし、FRBは緩和スタンスを維持しており、上昇幅は限定的だろう。

甲斐	ベア	110.00 ～ 107.00	4月FOMCでテーパリング議論は時期尚早との結果。再びテーパリングに関する期待が高まるのは次回6月FOMC又は8月ジャクソンホールか。5月は米経済指標の回復は織り込み済みで、調整色が継続すると予想。
小野崎	ブル	111.00 ～ 108.00	4月に見せたドル円の下落は年始から続いた米金利・ドル円急騰に対する調整。4月下旬から転換したようにドル円の調整は一服。ワクチン接種の進行や経済指標の良好さを見るにドルの強さを再確認する月となるか
玉井	ブル	110.50 ～ 107.50	4月は年初からのドル高の調整となったが、長期的に見て米経済回復を背景とした米金利上昇・ドル高の流れは不変。ただしFRBがハト派姿勢を続ける中、上値余地も限定的か。
原田	ブル	110.50 ～ 107.00	米国の大型財政政策や他国に比べワクチンの普及が進んでいる現状下、経済回復は継続しよう。米株式市場も堅調に推移する中、ドル円もつれ高となると予想。
大庭	ブル	111.00 ～ 107.50	4月の下落局面は一服。一目均衡表の雲の上限に下値サポートされながら、再び110円台を目指して上昇を予想。経済活動正常化による金融政策正常化を見込んだ米金利上昇と共にドル円も上昇。ワクチンの有効性に関する記事には注意。
上遠野	ブル	111.00 ～ 108.00	ワクチン普及の優位性もありコロナ後の経済回復において米国が中国に次ぎ一歩抜き出る中、短期的にはドル買いが強まる展開を想定。FRBの早期テーパリングを織り込みつつ底堅い米金利がドル円サポートか。
小林	ブル	110.50 ～ 107.00	米金利の低下やコロナ感染状況の悪化を背景に4月のドル円は下落する格好となったが、ワクチンの接種が進んでいることを受けてNYでは7月中に経済の正常化を目指す動きも見せており、ドル円は堅調推移となるか。
逸見	ブル	110.50 ～ 107.50	ワクチン接種の更なる進捗が期待される中、米経済回復期待は継続。Fedの早期テーパリングも意識され易く、米金利の再上昇とともに、ドル高地合いとなる展開を想定。
大谷	ブル	111.00 ～ 107.50	米長期金利は1.53%台では下げ止まっており、調整局面は一巡したものと考え。米国におけるワクチン接種も進んでいる中、足元の米経済指標も軒並み強い結果となっており、ドル円は底堅い推移を予想する。
鈴木	ブル	112.00 ～ 107.50	4月の下落で年始から続いた円安基調に対する調整は一服。ワクチンの普及により、各地で生活様態がコロナ前に戻りつつある中、経済の回復は更に加速し、ドルへの資金流入が進むと思われる。
大熊	ブル	111.00 ～ 107.50	ドルの調整売りは一巡しており、再び日米のワクチン接種のペースや経済成長見通しの格差に焦点が集まりやすい。米国では8月にテーパリングの議論開始の思惑が浮上していることから日米金利差拡大を背景としたドルの堅調地合いを予想。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.1900 ~ 1.2400
EUR/JPY 130.00 ~ 134.00

市場営業部 為替営業第二チーム 大谷 未央

■ 先月の為替相場

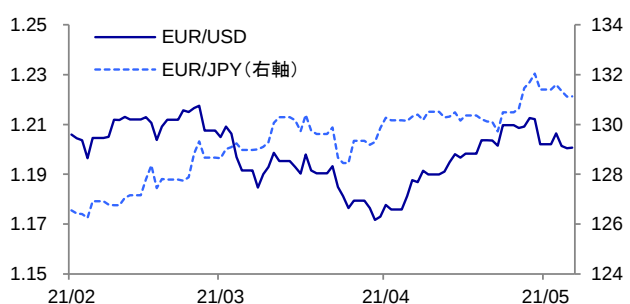
4月のユーロ相場は米金利低下を受けたドル売りユーロ買いから上昇する展開となった。月初1.17台前半でオープンしたユーロは、欧米株式市場の堅調推移を好感し、1.17台後半まで上昇。翌2日の米3月雇用統計では、非農業部門雇用者数変化(NFP)が市場予想対比大きく上振れる中、ユーロは1.17台半ばまで下落する場面も見られたが、相場への影響は限定的であった。5日はユーロ圏主要国におけるロックダウンやワクチン接種が遅れていることが嫌気され、1.17台前半まで下落する場面も見られたが、その後米金利低下を受けたドル売り優勢地合いに、ユーロは1.18台前半まで上昇した。またユーロ/ポンドの上昇もサポートとなり7日には1.19台前半まで上昇したユーロだが、クノット・オランダ中銀総裁が域内の物価動向に関して慎重な意見も示したことや、低下基調であった米金利が持ち直したことでドルが買われる動きにユーロは1.18台後半まで弱含む場面も見られた。しかし8日にはユーロ/ポンドの上昇を受けてユーロは1.19ドル台前半まで上昇。13日に発表された独4月ZEW景況感指数は市場予想を下回ったが相場への影響は限定的となり、ユーロは1.19台前半での推移が継続。その後米国で発表された3月CPIは市場予想を上回ったものの、FRBが現状の緩和的な政策を変更するに至らないとの観測が拡がると米金利低下とともにドル安が進みユーロは1.19台半ばまで上昇した。その後もドル売りの動きが強まる中ユーロは1.19台後半まで上昇し、19日にはEUが1億回分のワクチンを追加で仕入れるとの報道が伝わりユーロは1.20台前半まで上昇。22日のECB政策理事会では、市場の予想通り政策が据え置かれる結果となり、相場への影響は限定的であったが、その後のラガルドECB総裁の記者会見では「PEPPの段階的縮小については議論しなかった」との発言が伝わり、1.19台後半まで下落する場面も見られた。23日には発表されたマークイットユーロ圏PMIの結果が強かったことや、米金利の低下を受けてユーロは1.2100まで上昇。26日は欧州経済への期待感が高まる中、ユーロ買いの地合いが続く1.21台前半まで上昇したが、27日にかけては米金利が上昇する中1.20台後半に下落。28日のFOMCでは、市場予想通り政策金利が据え置かれる結果となったが、その後のパウエルFRB議長の講演で「まだテーパリングについて対話する時期ではない」と発言すると、米金利は急落、ドル売りが強まる中ユーロは1.21台前半まで上昇した。29日も前日の流れを引き継いでユーロは月高値の1.2150をつけ、30日にかけては1.21台前半での推移となっている。

■ 今月の見通し

4月のユーロ相場は対USDで400point超の上昇、目立った調整もなく月を通しての上昇となった。4月に入るとFRBに対する過度なテーパリング期待が剥落し、上昇していた米金利が調整入り。大きなマーケットのテーマがない中で為替相場も金利低下を睨みながらドルは全般的に売られる展開となった。その中でもユーロ買いの地合いは強く、ドル円が110円台から107円台まで下落する局面においてもユーロ円は130円台でもみ合い、レンジをブレイクすると2018年10月以来の高値を更新、対ポンドでもみ合いながら底堅く推移したことから、ドル売りに加え、ユーロが強く買われていたことを示唆している。ユーロが買われた要因の一つにはユーロ圏のワクチン接種拡大による「伸びしろ」にマーケットが注目していることに他ならないだろう。先進国の中で先陣を切った英国や、バイデン政権下の元で着々と接種を行っている米国に比べるとユーロ圏はややワクチン接種のスピードは遅く、4月に入ってもドイツ、フランスではロックダウンを行っている。但し今後ユーロ圏におけるワクチン生産量は倍増し、米製薬大手のワクチンを最大18億回分購入する等ワクチンの急速な普及に向けて準備を進めており、実体経済の回復に期待が高まっている。先日発表されたPMIについても、力強い経済の回復基調が確認できており、特に4月後半はそういったユーロ圏の経済回復期待をマーケットに織り込む動きが加速した。そのような環境下、今月は引き続き経済回復期待が相対的に強いユーロが小幅に強い展開を予想する。前述のワクチン普及に対する「伸びしろ」は相対的に大きい。マーケットはこれらを着々と織り込み、上昇基調が続くことをメインシナリオとする。4月下旬にはFOMC、ECBと金融政策イベントをほぼ無風で通過し、引き続き緩和スタンスを明確にした中ではあるが、早くも次回の決定会合に注目が集まり、欧州、米国のテーパリング開始時期に対する思惑に左右される展開となるだろう。米国で発表された経済指標は軒並み強いものになっているが、FRBがテーパリングを強く否定するスタンスを継続していることから今のところテーパリング観測は弱い。一方でECBに関しては現状PEPPの段階的縮小を議論するのは時期尚早としてはいるが、6月会合に向けて債券購入プログラムの縮小について様々な意見が出る可能性が高く、相対的にテーパリング期待は強い。但し、米国の増税観測からの急速なセンチメントの冷え込み等をトリガーとしたリスクアセットの急速な縮小に伴うドル買い等リスクシナリオも根強く、マーケットも大きなテーマが定まらない中で全般的な小動きも想定される。また「セルインメイ」というアノマリーも頭の片隅に入れておきたい。

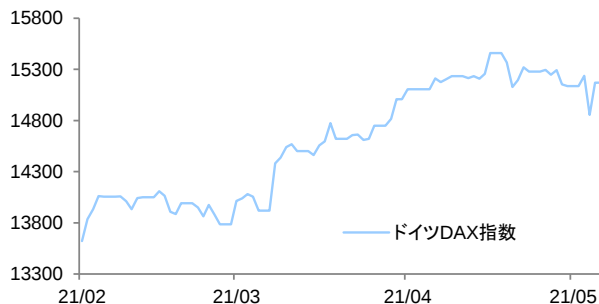
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/1	マークイット ユーロ圏製造業PMI	3月	62.4	62.5	57.9
4/7	マークイット ユーロ圏サービス業PMI	3月	48.8	49.6	45.7
4/13	独ZEW景気期待指数	4月	79.0	70.7	76.6
4/16	ユーロ圏CPI (前月比)	3月	0.9%	0.9%	0.9%
4/22	ECB理事会 主要政策金利	4月	0.00%	0.00%	0.00%
4/23	マークイット ユーロ圏製造業PMI	4月	62.0	63.3	62.5
4/23	マークイット ユーロ圏サービス業PMI	4月	49.1	50.3	49.6
4/26	独IFO企業景況感指数	4月	97.8	96.8	96.6
4/30	ユーロ圏CPI (前月比)	4月	0.5%	0.6%	0.9%
4/30	ユーロ圏GDP	1Q	-0.8%	-0.6%	-0.7%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ/ドル 見通しまとめ

ブル	10名	1.2300 ～ 1.1900	ベア	11名	1.2200 ～ 1.1800
----	-----	-----------------------	----	-----	-----------------------

※ レンジは中心値

田中	ブル	1.2300 ～ 1.1900	欧州はワクチン接種状況や景気面で米国に遅れを取っていたが徐々にキャッチアップ。欧米とも金融政策は当面不変もリフレ姿勢の強さからのドル売りや需給にサポートされユーロドルは堅調地合い継続を予想。
竹内	ブル	1.2400 ～ 1.2000	総じてリスク選好的なユーロ買い、特に対円での堅調地合いは継続か。コロナによる悪材料は一旦織り込まれ済みで、今後は経済指標等の改善を確認しつつ、欧州への資金フローが見込まれる相場になる可能性。
筒井	ブル	1.2500 ～ 1.1900	米同様、ECBのPEPP解除期待が注目されるのではないかと。従前のワクチン接種率が拡大するとともに景気刺激策も効果を発揮し、リスク資産上昇・債券安(金利上昇)を経てユーロ高へとつながるだろう。
加藤	ブル	1.2300 ～ 1.1900	ポストコロナの状況下、ECBはより積極的に債券購入ペースを調整すると予想される。その場合はやはり根本的に貿易黒字圏であることからユーロは底堅い動きを見せるであろう。
山岸	ブル	1.2300 ～ 1.2000	ワクチン接種の進展と経済活動再開期待でユーロは堅調推移継続を予想。一部の中銀総裁から金融正常化を示唆する発言あり、景気の緩やかな回復とともにECBがPEPPに基づく債券購入ペースを落とすとの見方も、ユーロ買い材料。
牛島	ベア	1.2200 ～ 1.1800	相場の決定要因として金利水準(金融政策)とワクチン接種の影響が大きいと見られる中、ユーロは本来のベアトレンドに戻ると予想。米金利の上昇基調への回帰とともにドルが買い戻され、ユーロドルは再び1.20台を割り込むと予想。
田坂	ベア	1.2250 ～ 1.1800	欧米いずれも6月の政策決定会合までは金融政策の大きな変化は考え難い。欧州でのワクチン普及期待がサポート、米国対比景気回復の遅れが重石となる形で、ユーロドルのレンジ推移を予想。
尾身	ブル	1.2300 ～ 1.1900	EURは堅調地合いが継続すると予想している。背景は、ドル売りの継続。リスクは政策金利の引き下げ。政府高官などから利下げ余地の言及が度々見られるが実現の確度は低そうだ。
上野	ブル	1.2300 ～ 1.1900	欧州域でワクチンが急速に普及している状況。昨冬、コロナウイルスが猛威を振るいロックダウンなどの対応に追われていた欧州に関しては、ワクチン接種に伴うリバウンドは相当に大きいのでは。
山口	ベア	1.2200 ～ 1.1700	先月のECB政策理事会では大規模な量的緩和が維持された。6月の会合では下期でのPEPPの買い入れペースの変更が議論される可能性があるも、欧州では新型コロナの変異株の流行が確認されており、徐々にユーロ売りに転じると予想。

甲斐	ブル	1.2300 ～ 1.2000	ワクチン接種の出遅れを取り戻すにつれ、ユーロ買いが継続すると予想。貿易黒字によるユーロ買いもサポートすると思われ、底堅く推移すると予想。短期的なドルの調整の受け皿にもなるうるか。
小野崎	ベア	1.2200 ～ 1.1700	4月こそドルの調整に応じてユーロも上昇を見せたが、引き続きワクチン接種による経済回復期待の進む米国対比欧州の回復は不透明である状況が続く。ドルの調整も一服感のある中で、コロナ対応・欧米金利差等を材料にユーロベアが再燃か。
玉井	ベア	1.2250 ～ 1.1800	米国対比、欧州では新型コロナウイルスのワクチン普及が遅れており、景気回復には時間を要するだろう。米金利には再び上昇圧力がかかると予想され上値の重い動きとなろう。
原田	ベア	1.2250 ～ 1.1800	ワクチンが普及しつつある米国に比し、欧州での普及はまばらな状況。米経済が回復する中、相対的にEURの魅力は薄れている。以前のようなEURの消去法的な買いは弱まるだろう。
大庭	ブル	1.2350 ～ 1.1950	EURは底堅い地合いが継続。欧州圏の実体経済はワクチン接種と行動制限の段階的解除により徐々に回復に向かっていることを背景にEUR買いが優勢。テーパリングの話も警戒する中、2月の高値圏を抜けてしっかりと上昇するか。
上遠野	ベア	1.2200 ～ 1.1850	コロナ変異種感染拡大の抑止に遅れが目立つ中、米欧金融政策スタンスの乖離がユーロ上値を抑えよう。ユーロドルは3月末に下値を試した後、足元反発している点、当局者のユーロ高けん制にも警戒したいところ。
小林	ベア	1.2200 ～ 1.1800	ドルの下落を受けて4月のEURは上昇する結果となったが、米金利の低下が一服したことや、ユーロ圏におけるワクチン接種状況の米国に対する劣後している状況に鑑みると、EURは上値重い展開になると想定する。
逸見	ベア	1.2200 ～ 1.1800	4月のドル売り局面は一巡。欧州圏は金利、ワクチン接種状況の両面で米国に劣る状況に変化なく、対ドルでは軟調な展開を想定。欧米間の対照的な金融政策へのスタンスもユーロの上値を抑える要因。
大谷	ブル	1.2400 ～ 1.1900	ワクチン接種の普及を受けた経済回復期待を背景にユーロが買われる展開は続くと考え。またFRBがテーパリングを強く否定する一方で、ECBはPEPPの段階的縮小への期待感も高く、引き続きユーロは底堅い展開になると考える。
鈴木	ベア	1.2200 ～ 1.1750	米国等に比べるとワクチン普及率は進んでおらず、経済回復についても一歩遅れをとっている印象。金融緩和の維持も明確にされており、米国の順調な経済回復によるドル買いにも押され、上値は抑えられる展開か。
大熊	ベア	1.2200 ～ 1.1800	欧州のワクチン接種のペースは加速してきたものの、接種率は未だ米国と開きがある状況。また、ECBが金利高を牽制していることから、欧米の金利差拡大が意識され、ユーロの上昇は失速すると思われる。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.3800 ~ 1.4200
GBP/JPY 148.00 ~ 155.00

欧州資金部 神田史彦

■ 先月の為替相場

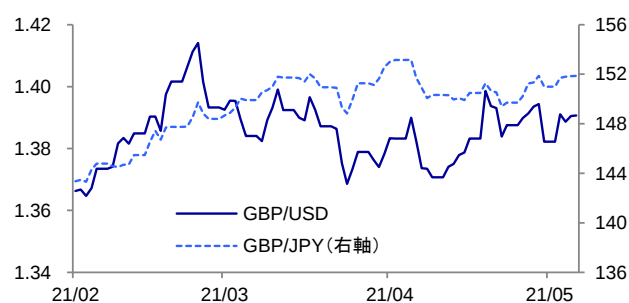
先月の英ポンド相場は、対円ではほぼ横ばい、対ユーロではポンド安、対ドルではポンド高で、単体では方向感を欠いた値動き。
月初は米長期金利を眺めて市場はドル安が進行していた。ただ、3月の後半から一本調子で下落していたユーロポンドは6日に0.85付近でとうとうユーロ売り圧力が和らぎ、その後反発し、ポンド安という滑り出しで始まった。ポンド安の材料は、上述ユーロポンド相場のテクニカル要因以外に、アイルランド暴動が連日報じられていたことしか見つけられなかった。
今振り返ると、5日には英首相より12日からの生活必需品以外の店舗販売や、屋外における飲食店などの営業再開も正式に発表された間もなく、ワクチン接種の進捗も引き続き堅調で、英における経済活動の復活に死角が無いようにしか見えず、加えて、8日に発表された3月のPMIは軒並みに予想を上振れ(中でも建設業が調査開始以来の高値を更新)、それまで堅調に推移していたポンドが急に安に一転したのが不思議でならない。
対円では153円付近から149円台、対ドルでは1.39台から1.36台まで急落した後は買い戻しが入り、下げ始めて6日間後にとうとうポンド高に一転した。その要因は、1.3680付近に推移していた100日線が二日連続(9日と12日)でサポートになったことも、単純に、ユーロポンドはすでに0.87台という買い戻しが入っても良い地合まで上昇していたのもあったように考えられる。
それから対ドルでは1.36台から1.40台、対円では149円台から150円台、対ユーロで0.87から0.86台まで、月初の下落幅を帳消しにし、さらに上値を切り上げた。ポンド高になるような材料は当時確認できなかったが、今振り返ると、ちょうど規制緩和が行われた12日に、国民のほぼ2割が2回目のワクチンを受けたという報道を受けて、それまでポンドの重しとなっていた「英国の回復は遅れる」という懸念が、市場から完全に消えたのかもしれない。その後の値動きは安定し、特段材料が観測されないなか1.39台を挟んで横ばいして、1.3950付近のポンド高・ドル安で月末を迎えた。

■ 今月の見通し

今月の英ポンド相場は、横ばいを予想する。強いて選ぶなら、ポンド下振れ方向の値幅が出る可能性を見込む。
国内のワクチン接種が計画通りのペースで行われているものの、今の市場は、経済回復の動向を材料視していないと言えよう。4月8日に発表された3月英マーケイト社の建設業PMIと、23日発表の英3月小売売上高などの大幅上振れが少しもポンド買いを誘わなかったことがそれを十分に示している。
よって、ワクチン接種の配布がどれだけ良好で、英経済の回復が市場が予想しているより早く示されても、ポンド高の要因になるように予想しないのは、妥当であろう。
その上、本邦の大型連休に加え、英国も連休(5月1日～3日と5月29日～31日)を控え、市場の動意が低下する可能性も低くない。英国内でポンド相場の動向を左右する要因があるとなると、5月6日(木)に予定される英地方選挙は挙げられるが、ここ一か月ののヘッドラインでポンドが明確に振れたことは無い。

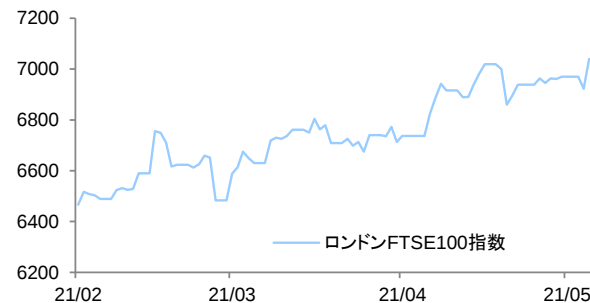
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/1	製造業PMI	3月	57.9	58.9	55.1
4/7	サービス業PMI	3月	56.8	56.3	49.5
4/8	建設業PMI	3月	55.0	61.7	53.3
4/13	鉱工業生産(前年比)	2月	0.5%	1.0%	-1.5%
4/13	GDP(前月比)	2月	0.5%	0.4%	-2.9%
4/20	ILO失業率	2月	5.0%	4.9%	5.0%
4/21	消費者物価指数(前年比)	3月	0.8%	0.7%	0.4%
4/23	製造業PMI	4月	59.0	60.7	58.9
4/23	小売売上高(含自動車/前年比)	3月	3.5%	7.2%	-3.7%
4/23	サービス業PMI	4月	58.9	60.7	56.3

豪ドル相場

予想レンジ:

AUD/USD 0.7580 ~ 0.7900
AUD/JPY 82.10 ~ 85.50

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

■ 先月の為替相場

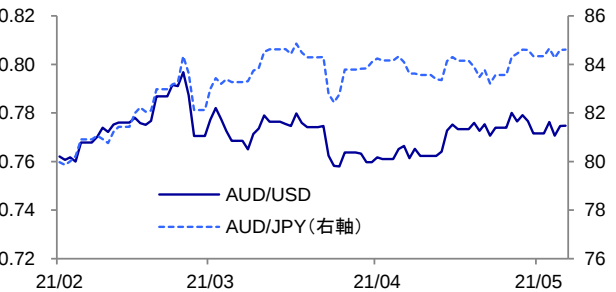
4月の豪ドル相場は月を通し0.75前半から0.78前半へ上昇した。1日、豪3月住宅価格は30年ぶりの高い伸びとなるも豪2月貿易収支が予想を下回り、豪ドルは徐々に値を下げ0.7533まで下落した。月前半は13日まで0.76台前半中心にレンジ推移。RBAでは市場予想通り、政策金利を据え置くとともに、2024年まで低金利を維持する方針を改めて示した。また、豪経済は想定より速いペースで回復していると楽観的な見通しを示すも、足元の住宅価格上昇に関しては注意深く監視するとし、YCC対象債券を現行の2024年4月償還から変更するか否かを年内に検討するとの説明も加わった。声明文発表後はRBA前の下げを全戻し、0.76半ばまで上昇。NY時間ではパウエルFRB議長が「インフレは一時的なものになる」との見通しを改めて示し、米株が上昇し、豪ドルを支えた。14日、NZ中銀は政策金利と資産購入プログラムの規模を据え置き、「必要なら政策金利を引き下げる用意がある」とした。金融刺激策を直ちには解除しない方針を示唆した事で、NZDは上昇。豪ドルも連れ高となり0.76後半へ上昇。ドルが下落し、原油を始めとした商品価格がラリーすると三週間ぶりの高値0.7738まで上昇した。14日から月後半は0.77台を中心に推移。15日、豪3月雇用統計は失業率が5.6%（前回値5.8%）へ改善したものの、正規雇用の減少が重しとなった。その後は米10年債利回り下落と原油高に支えられ、0.77半ばまで再度戻した。20日、RBA政策決定会合議事要旨（4月6日開催分）では、「金融緩和政策により為替レートが低く抑えられているが、不動産価格急上昇を背景に住宅ローン借り入れのトレンドを監視する必要がある」「現緩和政策で資金調達コストを極めて低く抑えることで、経済を支援している」との認識を示唆。YCCに関して対象債券を現行の2024年4月償還から2024年11月償還に変更するか否かを年内に決定する方針で経済指標とインフレ、雇用の見通しを鑑みて決定するとした。議事要旨発表後は原油や鉄鉱石の上昇も手伝い、1ヵ月ぶりの0.78台に載せ、0.7816まで上昇。その後は利益確定や新型コロナ再拡大の報道で0.77前半へと戻した。21日は豪3月小売売上（前月比・速報値）が予想を上回り0.7763まで上昇するも、新型コロナ感染再拡大が嫌気されリスクセンチメント悪化で0.77ちょうどまで下落した。22日はバイデン米大統領が所得が100万ドルを超える富裕層に対するキャピタルゲイン課税の税率を20%→39.6%と現行の約2倍に引き上げる提案をする見通しとの報道が伝わり、米株安、豪ドル売りとなり0.7693まで下落。最終週は企業決算を背景にS&Pが最高値を更新するなど底堅い米株の動きや鉄鉱石価格上昇を追い風に0.7820近辺まで上昇した。

■ 今月の見通し

5月の豪ドルは米長期金利の推移や新型コロナ拡大の報道に一時的に振られながらも鉄鉱石価格の上昇や豪州国内のファンダメンタルズ回復の堅調さに支えられ、レンジから上にやや値幅が広がる展開を予想する。4月の豪ドルはやや手掛かり難の中、鉄鉱石価格の上昇と株高がサポートし、月後半には何度か0.78台まで乗せたが、0.78台定着とはならず米国の景気回復や新型コロナ再拡大によるグローバルな景気回復遅延懸念からセンチメントの悪化が豪ドルの足枷となった。一方で、豪国内経済自体はこれまで新型コロナウィルスの打撃から急速、且つ着実な回復を見せており、豪政府予算が4年以内に黒字転換するという見方が国内のエコノミストの間で始めている。加えて、豪財政状況改善により、RBAが豪3年国債利回り目標の撤廃や国債買入入れ額の減額へ向かうという期待も一部で強い。この他、鉄鉱石に関しては足許で鉄鉱石価格が過去最高水準で推移していることで、豪州からの輸出量増加や鉄鉱石関係各社の雇用拡大にも繋がっており、連邦政府へは200億豪ドル規模の歳入増加となると試算されている。このように豪州単体で見ると国内経済の堅調さを示す豪ドルサポート要因が複数でてきている。今月の新材料としては5月11日には新年度予算が発表される。事前スピーチでフライデンバーグ財務相は「緊縮財政への急激な引き取りはしない」とし、予算案は失業率を5%未満に引き下げる事に焦点を当てるとし、これを達成するまでは財政再建を開始しないとしている。故に3月末にジョブキーパー（賃金補助）、ジョブシーカー（失業特別手当）の各プログラムは終了しているものの、新型コロナの打撃を受けている業界を継続して支援する為のプログラムが何らかの形で出てくると予想する。これが経済回復のてこ入れとなると、豪ドルは下値を支えられ易いとみる。5月20日にはジョブキーパー、ジョブシーカー終了後、初の豪雇用統計（4月分）が発表される。ここではプログラム終了による失業率への影響がどれほど出ているのかも合わせて精査したい。但し、米国においても経済活動の正常化が進展を見せており、市場のテーバリング期待は高まり易い環境になっている。「足元の米金利の上昇は一過性」と米パウエルFRB議長によって繰り返されてはいるが、米経済回復が米経済指標において着実に実績として確認されれば、直近約1.52%台まで下落している米長期金利が底堅く推移し、上昇するとみる。これを背景に豪ドルが相対的に頭を抑えられる可能性も十分にある為、取引タイミングは十分に注意したい。

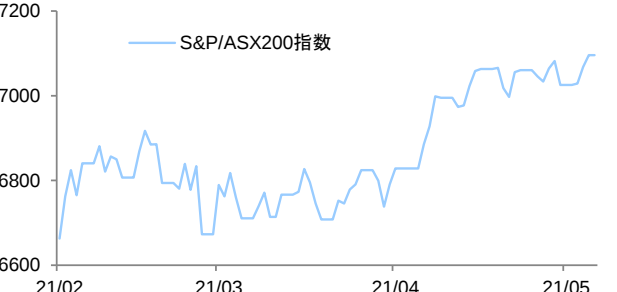
■ 為替の動き

（資料）ブルームバーク



■ 株価指数の動き

（資料）ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
4/1	小売売上高(前月比)
4/1	貿易収支
4/6	RBAキャッシュレート
4/15	雇用者数変化
4/15	失業率
4/21	小売売上高(前月比)
4/28	CPI(前期比)
4/28	CPI(前年比)

（資料）ブルームバーク

期間	予想	結果	前回
2月	-1.1%	-0.8%	0.3%
2月	A\$9872m	A\$7529m	A\$9616m
4月	0.1%	0.1%	0.1%
3月	35.0k	70.7k	88.7k
3月	5.7%	5.6%	5.8%
3月	1.0%	1.4%	-0.8%
1Q	0.9%	0.6%	0.9%
1Q	1.4%	1.1%	0.9%

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.2000 ~ 1.2650
CAD/JPY 87.50 ~ 90.82

米州資金部カナダ室 芦崎 瑞穂

■ 先月の為替相場

4月は1.2596でオープン。米国の大規模なインフラ投資計画やワクチン接種の進展、経済指標が示す良好な結果に景気回復への期待が高まっている。しかし現状は国ごとのワクチン接種格差が顕著に表れ、世界全体を見ると新型コロナウイルスが再拡大している。市場の早期テーパリング観測に対し、FRBは現行の金融政策維持の姿勢を崩さない。その一方でカナダ中銀が金融緩和と縮小に踏み切るとカナダドルが急伸。USD/CADは1.2653をトップに上値が重く、米金利低下を受けてのUSDドル安も相まって月末にかけてカナダドル高が進んだ。

月初、米長期金利低下により1.25台前半まで値を下げたUSD/CADは、米3月雇用統計やISM非製造業景況指などの良好な結果を受け、徐々に値を戻す。OPECプラスが協調減産を5月から段階的に縮小することを決定。原油価格下落によりカナダドル売り優勢になると思われたが、株価上昇によるリスク選好と米金利低下によるUSDドル売りが強くカナダドルの下値は限定的。更に週間石油在庫統計で、米ガソリン在庫が予想に対して大幅に増加したとの報道が伝わると、原油価格が58.12まで下落し、1.2635までカナダドルが売られる場面が見られた。テーパリング観測が高まる中、FRBは依然として物価安定と最大雇用の確保が達成するまで、これまでの金融緩和政策を維持するとした。FOMC議事録要旨やパウエル議長の発言がハト派姿勢と捉えられUSD/CADは1.25台半ばまで下落。9日カナダ3月雇用統計で失業率が7.5%まで回復すると1.2526までカナダドルが買われた。しかし13日米国で副作用の懸念からジョンソン＆ジョンソンのワクチン使用を一時停止するとの報道が伝わると一気にリスク回避ムードとなり、USD/CADは1.2629まで上昇。その後は米金利低下と共に1.2527まで反落。狭いレンジでのみ合いをつづけた後、原油高に支えられカナダドル買いが進み、USD/CADは1.2471-1.2559の間で推移。20日インドやヨーロッパで変異種による新型コロナウイルスが再び増加しているとの報道が伝わると、リスク回避ムードが再燃しUSD/CADは1.2624まで急伸した。しかし、21日のカナダ中央銀行政策金利決定会合でタカ派姿勢が示された事を受けて一転。カナダドルが1.2460まで高騰。28日のFOMCでテーパリング観測が後退するとUSDドルが急落。月末はカナダドル高が続き、一時2018年1月以来の高値となる1.2266をつけた後、1.2287でクローズ。

■ 今月の見通し

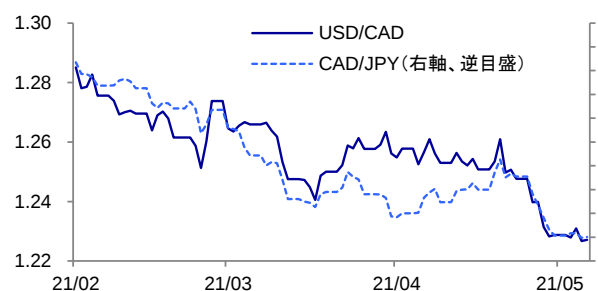
カナダでは新型コロナウイルスの変異株の拡大で感染者が急増、再び各地でロックダウン措置を実施することが決定された。注目のカナダ中央銀行政策金利決定会合では政策金利を0.25%に据え置き、毎週の国債買い入れ目標を40億カナダドルから30億カナダドルへ縮小することが決定された。経済見通しでは2021年の国内総生産が4.0%増から6.5%増へと引き上げられ、需給ギャップの解消により2%の物価上昇率目標は2022年後半に達成すると予測。利上げ可能な時期を2023年から2022年後半へと前倒しにした。カナダのワクチン接種率のペースが上がっていることや、経済指標が示す好調な結果に消費者マインドの改善がうかがえることなどが、カナダ中銀のスタンスがタカ派へシフトした要因となっている。2021年度連邦予算案では500億カナダドルの新年度予算案が発表された。2008年の景気後退時、政府からの支援金は主に企業に充てられたが、今回は消費者に直接支援金が行き渡る。政府からの緊急支援により家計貯蓄率が高まっており、それが後に消費と雇用に大きく寄与すると期待されている。一方で低金利の恩恵を受け加熱する住宅市場への懸念は増すばかりだ。住宅価格は上昇を続け、3月の住宅着工件数は過去最大を塗り替えた。政府は住宅市場に注視すると言いつつも、今回の連邦予算案では外国人による投資目的に購入された住宅への課税のみで十分な対策とは言えなかった。今年行われるカナダの総選挙に向けて、政府は住宅市場への介入は控えたいということも見受けられる。カナダ金融庁から提案されたモーゲージ・ローンの審査の引き上げは6月から実施され、住宅価格の高騰抑制となるかが期待される。ロックダウンが実施された4月の経済指標の落ち込みは予想範囲内と思われる。原油価格は新型コロナウイルス感染拡大の懸念に下振れリスクがあるが、需要回復の期待に引き続き上昇しカナダドル高をサポートすると推測。しかしFRBが金融緩和と縮小を示唆すれば、長期金利や長期債券利回りが上昇すると考えられ、USDドル高圧力が高まるだろう。またバイデン政権によるキャピタルゲイン増税案などが株安を助長すればUSDドル買いが進むと思われる。5月は引き続き新型コロナウイルス感染拡大状況とワクチン接種率、FRBや各国の要人発言に注目。米長期金利の動向を睨みながらUSD/CADは1.20-1.2650で推移すると予想。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の有名待ち合わせスポット』 トロントで有名な新市役所は未来を彷彿とさせるデザインで、2つ並んだカーブのかかった建築物の真ん中に市議会が行われるドーム型の施設が設置されています。その目の前にネイサンフィリップス スクエア(Nathan Phillips Square)という広場があり、待ち合わせ場所におすすめです。トロントのダウンタウンの中心に位置し、交通機関も充実。ここを起点にしてどこへ行くにも便利です。トロントで1番大きいショッピングモールであるイートンセンター(Toronto Eaton Center)は目と鼻の先。(モールは330以上の店舗を備え、フードコートも充実しています。)広場の中央には噴水があり、市民や観光客がゆったりと過ごしています。噴水は冬にアイススケートリンクに様変わりします。大人から子供までスケートに興じる姿は、トロントの冬の風物詩となっています。また、たくさんのイベントやコンサート、美術展示会などが催され、夏から秋にかけて開催されるファーマーズマーケットでは地元の新鮮な果物・野菜、フルーツパイなどが店頭に並び、買い物客で賑わいます。冬にはトロント市オフィシャルのクリスマスツリーが飾られ、目を楽しませてくれます。トロントの主要ストリートであるヤングストリートとダンドスのインターセクション位置するヤング ダンドス スクエア(Yonge-Dundas Square)も合わせに最適な場所です。2002年に完成したわりと新しい広場で、周囲にはエンターテインメントとショッピングセンターが立ち並びトロント発のスクランブル交差点や、たくさんの電子看板やスクリーンが設置されていることからニューヨークのタイムズスクエアやロンドンのピカデリーサーカスと度々比較されます。ここでも色々なイベントが催され、いつも賑やか。待ち時間も楽しく、あっという間に過ぎてしまうのではないのでしょうか。

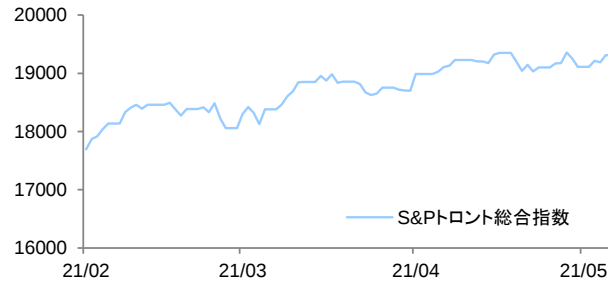
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/1	住宅建設許可件数(前月比)	2月	-1.4%	2.1%	7.6%
4/7	貿易収支	2月	1.30b	1.04b	1.26b
4/9	雇用変化	3月	100.0k	303.1k	259.2k
4/9	失業率	3月	8.0%	7.5%	8.2%
4/15	製造業売上	2月	-1.0%	-1.6%	3.10%
4/19	住宅着工件数	3月	255.0k	335.2k	275.6k
4/21	消費者物価指数(前年比)	3月	2.3%	2.20%	1.1%
4/21	カナダ中央銀行政策金利決定会合		0.25%	0.25%	0.25%
4/30	GDP (前月比)	2月	0.5%	0.4%	0.7%
4/30	GDP (前年比)	2月	-2.3%	-2.2%	-2.3%

韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW 1080 ~ 1130
 KRW/JPY 9.615 ~ 10.101
 JPY/KRW 9.900 ~ 10.400

(注) 100韓国ウォンあたりの対円レート

東アジア資金部ソウル資金室 中野 博文

■ 先月の為替相場

4月のドル/ウォン相場は上値の重い展開。4月1日は1,128.0ウォンでオープンし、中国3月製造業PMI(結果:50.6、予想:51.3)が弱かったことから、ドル/ウォンは人民元安に連れ月高値1,133.2ウォンまで上昇した。5日は良好な米雇用統計を受けて1,128.0ウォンでオープンし、6日にかけ外国人投資家による株や債券の買いに押されドル/ウォンは1,120ウォンまで下落。海外時間にはIMFが2021年世界経済成長見通しを上方修正(世界:5.5%→6.0%、米国:5.1%→6.4%、韓国:3.1%→3.6%)したほか、バイデン大統領が推進する公共インフラ投資法案について既存の予算調整措置が使用であるとの見方から法案の早期可決期待が市場に広がるなど、好ニュースが多かったものの、ポジションの偏りから市場全体が調整相場となると、ドル売り優勢の展開が継続。8日海外時間にかけ米長期金利が低下し、9日にはドル/ウォンは1,113.6まで下落した。しかし、9日海外時間に発表された米3月PPI(結果:前月比+1.0%、予想:同+0.5%)が予想を上回ったことを受けて米長期金利が上昇し、週明けの12日からはドル/ウォンも上昇基調となり、韓国大手企業による外国人投資家向けの配当金の支払いフローもあり、1,127.9ウォンまで反発。しかし、米3月CPI(結果:前月比+0.6%、予想:+0.5%)がほぼ予想通りとなると、米長期金利が大きく下落し、ドル/ウォンも上値の重い展開。半導体業界を中心とした韓国企業の業績期待感や外国人投資家による韓国株買いもあったほか、良好な中国の経済指標を受け世界的にリスクオン相場となり、16日にドル/ウォンは1,113.5ウォンまで下落した。19日は先週末で買い優勢だった外国人投資家による韓国株式の売り越しや、外国人投資家あての配当を受けたウォン売りフロー等を受け、ドル/ウォンは1,120.0まで上昇。その後市場の方向感を出す材料に乏しい中、1,110ウォン台で推移した。23日にはバイデン大統領による富裕層に対するキャピタルゲイン税引き上げ(20%→39.6%)報道があったものの、ドル相場への影響は限定的となった。その後は、FOMCが意識され方向感に乏しい展開。29日FOMCでは景気認識を上方修正をしたものの、テーバリングの時期については時期尚早との姿勢を堅持しており、ややドル売りとなったほか、月末の実需のウォン買いもあり、ドル/ウォンは1,105.7まで下落。結局先月末対比15.7ウォン下落した、1,112.3でクローズ。

■ 今月の見通し

5月のドル/ウォン相場は方向感に乏しい展開を予想する。4月は、FEDによる緩和的な姿勢の維持や、欧州におけるワクチン接種の進展などがあり、ドル売り相場となり、ドル/ウォンも下落した。今月のドル/ウォンの注目材料は以下の4つ。①外国人投資家向けへの韓国企業の配当(ウォン売り需要)②米金利の推移によるドル買いへの圧力③外国人投資家による韓国株式および債券の売買動向④良好な韓国企業の実需のウォン買い

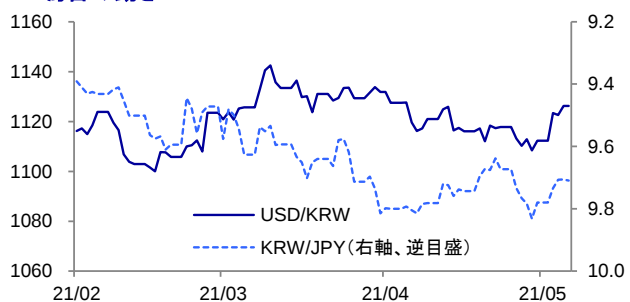
①については、大手韓国電子企業による配当は既に完了しつつあり、今後のウォン売り圧力は限定的かと思われる。一方で、②4月に米10年債金利が一時1.50%付近まで下落しており、足許の景気状況を勘案すると5月にも米長期金利が同様のペースで下落するとは考えにくい。一方で、FEDは緩和的な姿勢の維持しており、ドル買いが強まる印象も持ちにくい。③は債券を中心に海外投資家からの資金流入が続いている。足もとではドル/ウォンベースが縮小しているため、やや投資妙味は薄れつつあるものの、それでも他の先進国対比金利が高いことから、流入が続きウォン買い材料になるのではなかろうか。④半導体業界を中心に韓国企業の業績は好調であり、經常収支も非常に高い状況を維持している。こちらもウォン買い圧力として意識されよう。かかる状況下、③、④によるウォン買いが入ることでドル/ウォンは上値の重い展開が継続するのではなかろうか。ただし、米長期金利が低下した4月と異なり、②によるドル売り圧力は減ると考えられることから、ドル/ウォンの下落速度は緩やかなものになると考えられよう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の有名待ち合わせスポット』
 当地の有名待ち合わせスポットとして皆さんに覚えていただきたいのは、明洞(ミョンドン)にあるミョレ明洞になります。来られたことがある方も多いかと思いますが、明洞とは韓国最大の繁華街のことで日本でいうところの銀座のような場所だと考えてください。明洞は縦横にいくつかの通りがあり、道路の両サイドに様々なショップが立っていることから、事前に待ち合わせを決めないと会いにくい場所となっております。ミョレ明洞は明洞地区の南の入り口である地下鉄4号線明洞駅のすぐそばにあります。観光で来られた方が一番使いやすい地下鉄の駅直上にあることから、皆さんここを目印にしているようです。そのほか、明洞にある待ち合わせスポットというロッセ百貨店です。こちらも地下鉄2号線乙支路(ウルチロ)入口駅のすぐそばにあり分かりやすいこと、日本となじみのあるロッセが経営する百貨店であり、日本のお店も多く出店していることから待ち合わせ場所として人気です。また百貨店内には免税店もあり、観光で来られる際にはぜひ訪れていただきたいスポットです。ワクチン接種は徐々に進んでおりますが、日本と韓国の往来が復活するにはもう少し時間がかかりそうです。再び観光ができるようになったら、ぜひ明洞に遊びに来てください。

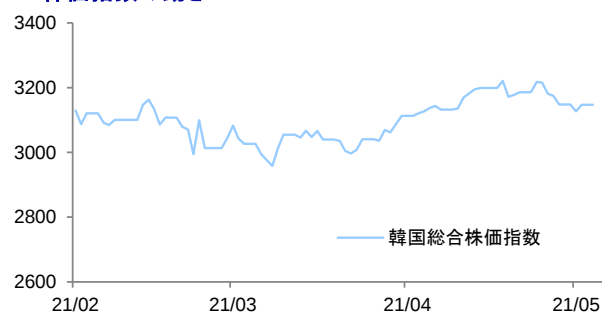
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/1	輸入(前年比)	3月	19.1%	18.8%	14.1%
4/1	輸出(前年比)	3月	16.6%	16.6%	9.2%
4/1	貿易収支	3月	\$4,295m	\$4,175m	\$2,503m
4/2	CPI(前年比)	3月	1.5%	1.5%	1.1%
4/14	失業率	3月	3.9%	3.9%	4.0%
4/15	BOK政策金利発表		0.5%	0.5%	0.5%
4/27	GDP(前年比)速報値	1Q	1.2%	1.8%	-1.2%
4/28	消費者信頼感	3月		102.2	100.5
4/30	鉱工業生産(前年比)	3月	4.2%	4.7%	0.9%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 27.50 ~ 28.00
TWD/JPY 3.85 ~ 3.93

東アジア資金部台北室 柴田 裕央

■ 先月の為替相場

4月のドル/台湾ドルは、終値で約24年ぶりの台湾ドル高水準を更新。

ドル/台湾ドルは28.500でオープン。月初は連休明けに台湾株の上昇につられて台湾ドルが買われやすく、28.40付近まで下落。しかし、28.40を割る場面では輸入企業のドル買いも入り、28.40付近での推移が続いた。

月半ばに入ると取引量が少なく、動意に乏しい展開となり、28.40付近での推移が続いたが、台湾加権指数が初の17,000ポイントを上回りクローズすると、台湾ドル買いが優勢となり、28.32付近まで下落。

月後半に入ると台湾加権指数が最高値を更新する中、台湾ドル高が加速。28.20を割り込むと、輸出企業もドル売りを急ぎ、28.00ちょうど近くまで下落。しかし、輸入企業のドル買いが入ったことや、台湾株が小幅な下落にも関わらず外国人投資家が台湾株を大きく売り越したと報道されると、28.15付近まで戻した。その後は再び、台湾加権指数が最高値を更新続ける中、台湾ドル高の流れに。28.00を割り込むと、月末の輸出企業のドル売りも入り、一時27.836まで下落し、28.00を下回る水準で推移した。

■ 今月の見通し

5月のドル/台湾ドルは台湾ドル高を見込む。

4月については、米金利の上昇が落ち着いたこともあり、台湾株のポジション調整をしていた外国人投資家が台湾株の買い戻しに動いたことで台湾ドル高となった。3月の台湾加権指数は横ばいであったが、4月に入り、初の17,000ポイント台に入り過去最高値を更新した。また、好調な輸出も台湾ドル高をサポートする材料となった。

5月については、足許の台湾ドル高が続くとみる。引き続き、台湾企業の業績は半導体関連を中心に好調なため、株価の上昇、輸出の増加が台湾ドル高の材料となるであろう。ただし、新型コロナウイルスの感染状況の改善やワクチン接種率の向上により、景気回復期待から米長期金利が再び上昇した場合には、3月同様に調整が入る可能性があるため、台湾ドル高が和らぐ可能性には留意したい。

なお、先月の本欄で、「3月に台湾中銀が立法院に対して為替介入額が増加したことを受けて米国の為替操作国認定の3条件が揃うと報告を行った」とお伝えしたが、4月に発表された米財務省の為替報告書では、その通り3条件が揃ったものの、為替操作国の認定は見送られた。見送られた理由としては、新型コロナウイルスの感染拡大に起因する貿易と資本フローの大幅な阻害に加え、コロナ禍に対応するための各国の財政・金融政策を考慮すると、認定するには十分な証拠を得ることが出来なかったためとしている。一方、台湾中銀は4月の為替報告書の発表を前に台湾ドルに関する報告書を米財務相に提出して状況説明を行っていたと発表。この一連の流れは米台の今の関係がよく分かる出来事であった。

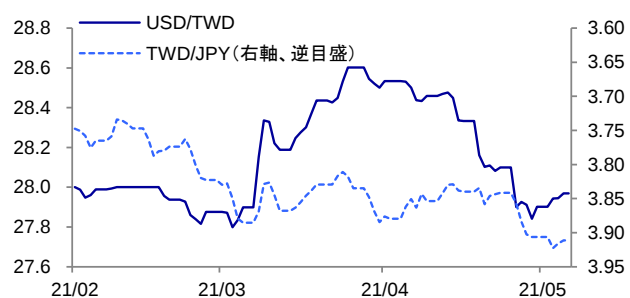
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の有名待ち合わせスポット』

台湾では有名な待ち合わせスポットはないようで、台湾に赴任してから待ち合わせスポットで待ち合わせたことがなく、周りに聞いてもないとのこと。強いて言えば、台湾最大の駅である台北駅のターミナル1Fの真ん中に吹き抜けの広場でしょうか。ここの床に座り込んで、ご飯を食べたり、ケータイをいじって人や電車の時間を待っています。コロナが流行り始めた際には、人を密集させないために地面に座ることが禁止されましたが、今では禁止も解除され、座り込んでいる人を多く見かけます。ちなみに、床は白と黒のタイルで格子模様になっているのですが、なぜか黒いタイルばかりに座っている人が多いです。

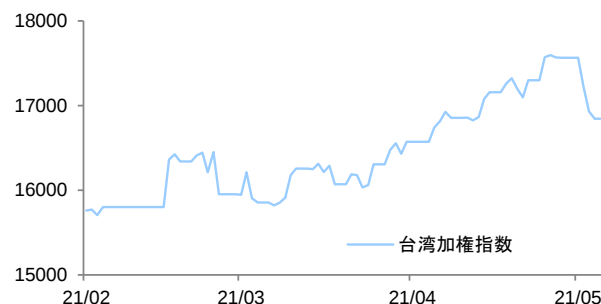
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/7	外貨準備高	3月	-	539.04B	543.33B
4/8	CPI (前年比)	3月	1.35%	1.26%	1.40%
4/9	輸出 (前年比)	3月	20.0%	27.1%	9.7%
4/9	輸入 (前年比)	3月	16.2%	27.0%	5.7%
4/9	貿易収支	3月	4.43B	3.66B	4.51B
4/20	輸出受注 (前年比)	3月	34.9%	33.3%	48.5%
4/22	失業率	3月	3.70%	3.72%	3.73%
4/23	鉱工業生産 (前年比)	3月	9.70%	16.78%	2.52%

(資料) ブルームバーク

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7550 ~ 7.7750
HKD/JPY 13.75 ~ 14.10

東アジア資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【4月の香港ドル直物相場】

4月の香港ドル直物相場は、1年ぶりの安値水準となる7.7865を付けた後、米金利と米ドルの反落を背景に、7.76台まで上昇する展開となった。米国の第2四半期の経済指標は強い結果が予想されているものの、テーパータントラムを懸念してか、米国連邦準備理事会（FRB）は緩和政策を変更しようとはしていない。香港ドルと米ドルの金利差はほとんどゼロに近い水準となっており、キャリートレードを目的とした資金流入は引き続き限定的となる見込みだ。香港ドルの1年物フォワードポイントは、ゼロ近辺からマイナス30ポイントまで低下した。香港市場での底堅いIPO需要や、ストックコネク（中国本土市場との株式相互取引制度）を通じた香港への資金還流が香港ドル相場のサポートとなった。輸出産業の着実な回復と歩調を合わせながら、香港経済の見通しは改善しつつある。新型コロナウイルスの抑制とベース効果を背景に、小売売上高も直近2年間の下落基調に歯止めがかかりつつある。加えて、失業率も、2月の7.2%を天井に回復に転じ、3月の失業率は6.8%まで低下した。経済回復に向けて楽観的な見方が着実に広がっており、市場のリスク許容度も高まっている。

【4月の香港ドル金利市場】

香港金融管理局（HKMA）のアグリゲートバランスは過去最高水準の4,575億香港ドルを維持しており、香港ドルの流動性は潤沢な状況が続いている。IPO市場への投資意欲は徐々に鎮静化しており、短期の香港ドルHIBORは低い水準のまま。今後も潤沢な流動性状況が続いていくとの見通しを織り込み、香港ドルHIBORは一段と低下。1か月物香港ドルHIBORは0.086%、3か月物は0.175%と、それぞれ10年来の低い水準を付けた。米ドルと比較しても香港ドルの緩和状態は顕著で、1か月物・3か月物それぞれの金利差（香港ドルHIBOR－米ドルLIBOR）はマイナスに転じた。FRBのテーパリング観測後退が長期金利の低下圧力となり、米ドル長短金利差（3か月物LIBOR－5年物スワップレート）は-70bpsまで縮小。香港ドルの長短金利差も同様に、米ドルに追隨して-70bpsまで縮小した。

■ 今月の見通し

【5月の香港ドル直物相場】

5月の香港ドル直物相場は、7.755から7.775のレンジ内推移を想定する。大手中資系インターネットアプリ企業のIPO計画が第2四半期中には予定されていないと明らかになったことで、IPO関連の資金流入は限定的になると見られており、香港ドル直物相場を押し上げる圧力は乏しいだろう。株式相場の持ち直しによる資金流入は期待できるだろうが、米国FRBが緩和政策を続ける見通しである中、香港ドル市場におけるキャリートレードの妙味は依然乏しい。加えて、香港の地場銀行に対する米国の制裁や、政情不安がダウンサイドリスクとして中期的に意識されるだろう。しかし、米ドルとのベッグ制については、他に効果的な代替手段がない中で、引き続き維持されるというのが我々の見立てだ。

【5月の香港ドル金利市場】

アグリゲートバランスが記録的な残高を維持する中で、香港ドルの短期金利は引き続き低い水準で推移するだろう。取引バンドの上限である7.75に到達するまでは幾分上昇余地があり、HKMAが未だ為替基金証券（EFBNs）の発行を通じた香港ドルの吸収に動こうとしていないことを勘案すれば、香港ドルの潤沢な流動性状況が近く変化するとは思えない。こうした背景から、一段と金利低下が進む可能性がある。これまで香港ドル金利の上昇要因となってきたIPOマーケットも静かな状況となっており、特段の金利押し上げ材料に乏しいというのが現状だ。

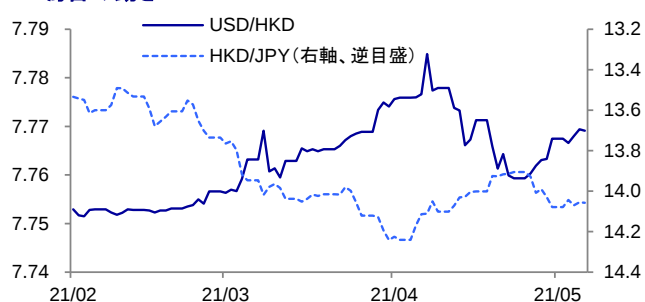
■ 今月のつぶやき（現地からの声）

『当地の有名な待ち合わせスポット』

昔から有名な香港の待ち合わせスポットとしては、尖沙咀（チムサーチョイ）のスターフェリー乗り場にある5つの旗棒が一番に挙げられます。目立つ場所もわかりやすく、すぐにフェリーに乗れるのでそこからの移動にも大変便利です。ここに集合し、海岸線沿いを歩いてビクトリアハーバーの夜景を眺めたり、フェリーで海を渡ってすぐの所にある香港大会堂にてオペラやミュージカル等のショーを楽しむというのが定番のコースです。その他、九龍半島側で言えば、香港で最も混雑する駅の一つである、旺角（モンコック）駅には若者がよく集まります。駅構内のATM付近のスペースは待ち合わせ場所として特に人気でいつも混雑しています。香港島側で特に人が多いのは銅鑼灣（コーズウェイベイ）ですが、駅前広場がとても狭くて不便な為、駅前にあるデパートが待ち合わせ場所としてよく利用されます。

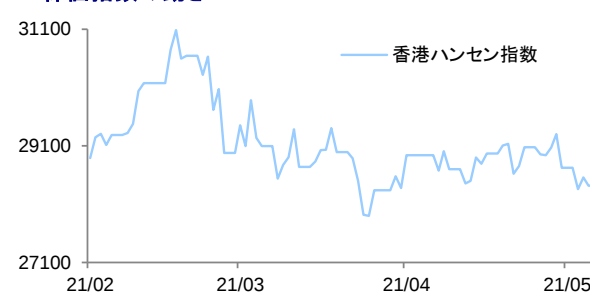
■ 為替の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

（資料）ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

（資料）ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/8	日経香港PMI	3月	-	50.5	50.2
4/9	外貨準備高	3月	-	\$491.3b	\$495.7b
4/22	失業率(季調済)	3月	7.1%	6.8%	7.2%
4/23	CPI(コア・ジット(前年比))	3月	0.8%	0.5%	0.3%
4/27	輸出(前年比)	3月	15.8%	26.4%	30.4%
4/27	輸入(前年比)	3月	15.5%	21.7%	17.6%
4/27	貿易収支(HKD)	3月	-37.5b	-27.0b	-14.7b
4/30	財政収支(HKD)	3月	-	-	19.7b

中国人民幣相場

予想レンジ:	USD/CNY	6.4000	～	6.7000
	CNY/JPY	15.80	～	17.50
	100JPY/CNY	5.7000	～	6.3000

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 末吉 小絵

■ 先月の為替相場

4月のドル人民元為替相場(USDCNY)は米金利一服や堅調な中国経済指標の影響を受けて6.57から6.46へ下落した。

USDCNYは1日に6.55台半ばで取引を開始。米国で中国企業等を対象とするブロック取引が行われたことを背景に、人民元売りが優勢となっていた中、同日6.57台後半まで大きく上昇。4月の最高値をつけた後は、米金利低下によるドル売りが優勢となり、USDCNYも水準を切り下げ、7日には6.53台半ばまで下落。その後は材料に欠ける中、6.56レベルまで反発上昇。

12日は6.55台後半で取引を開始。6.56をつけた後はドル売り元買いが優勢となり6.54台後半へ。13日、市場予想よりも黒字幅が縮小した中国貿易収支の発表を受けて6.55まで上昇も、夕方以降米金利が低下する流れとなったことや米CPIの結果が事前予想をわずかに上回るも米国の金融政策を変えるほどでは無いと受け止められたことからドル売りが優勢に。16日に発表された中国GDPをはじめとする主要経済指標が堅調な結果であったこともドル売り元買い要因となり、USDCNYは16日に6.52付近まで下落してクローズ。

16日夜間に発表された好調な米国経済指標を受けて小幅にドル買いが進み、19日は6.53レベルで取引を開始。米金利の低下や習近平国家主席の演説を背景に、20日、USDCNYは節目である6.50を下回り、6.49台半ばへ。その後は買戻しが見られ小幅な値動きとなるも6.50を上抜けるには至らず、再びドルが売られる展開。22日には6.48台前半まで下落。23日には再び上昇するも、6.50には至らず。

26日は6.48台半ばで取引開始。週前半は米金利上昇や銅価格上昇も6.48台での小幅な推移が続いたが、28日夜のFOMCを受けて6.46台へ下落。約2か月振りの水準を推移している。

■ 今月の見通し

5月のUSDCNYは上値の重い展開を予想。

中国GDPをはじめとする経済指標はコロナからの回復を示す強いヘッドラインとなっており、元高の大きな要因となっている。中国への資本流入も引き続き元高をサポートすると考える。一方、直近発表された中国の貿易収支の金額は黒字を維持しているものの金額は縮小しており、今後の動向には注視したい。

中国人民銀行のスタンスについては特段のアップデートは無く引き続き「金融政策は穏健に」との方針が続くと考えられる。

一方、米国では金利上昇が一服したことからドル安が続いている。Fedのスタンスが変わらない限りはドル安が続くと考えるが、新型コロナウイルスワクチン接種の普及や、指標改善による経済回復への期待感、米当局のインフレ容認姿勢といった要因が再び材料視された際のUSDCNY上昇には注意したい。

心理的には、6.48を下回ると、今年1月から2月にかけてレンジ相場を形成していた6.45-6.48のゾーンに入ることとなる。米金利が反転上昇しなければ、年初最安値である6.42前半が意識されつつ、USDCNYは上値の重い展開が続くと考える。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の有名待ち合わせスポット』

上海では、飲食店やお出かけスポットが駅から離れていたり点在しているため、基本は現地集合。タクシーで直接現地向かうことも多い。

あえて挙げるとすれば、下記のようなスポットであろうか。

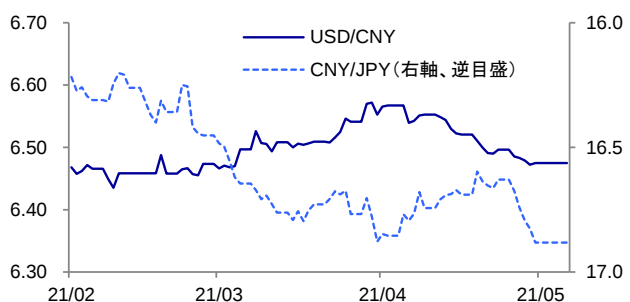
・そうはいっても駅集合
ターミナル駅であり、すぐ近くに有名な歩行者天国である南京東路がある「人民広場」。久光百貨店をはじめとする高級デパート店が多い「静安寺」。会社の最寄り駅であると同時にショッピングモールや観光スポットが乱立する「陆家嘴」。同名の駅で待ち合わせをすれば、何でもすることができる。相手が遅れる場合は近くのカフェでお茶することも可能。

・新天地星巴克
上海おしゃれ買い物スポットである新天地。その新天地入り口に位置する星巴克(＝スターバックス)。石庫門の作りになっており、横浜の赤レンガ倉庫を白く塗ったような綺麗なお店。インスタ映え最高のおしゃれ待ち合わせスポット。

・仙霞路/安龍路
日本人駐在員で知らない人はいない交差点の名前。東西に走る仙霞路と南北に走る安龍路には、美味しい日本食居酒屋やバーが豊富。ご飯を食べる場所が決まっていない場合、とりあえずこの交差点に集合して探そう、ということも多い。

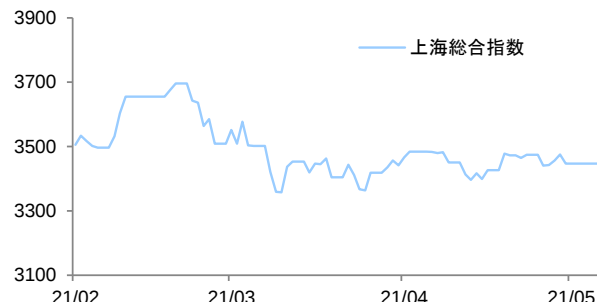
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
3/31	製造業PMI	3月	51.2	51.9	50.6
3/31	非製造業PMI	3月	52.0	56.3	51.4
4/1	財新・製造業PMI	3月	51.4	50.6	50.9
4/6	財新・サービス業PMI	3月	52.1	54.3	51.5
4/9	PPI(前年比)	3月	3.6%	4.4%	1.7%
4/9	CPI(前年比)	3月	0.3%	0.4%	-0.2%
4/13	貿易収支(年初来)	3月	\$52.0b	\$13.8b	\$77.5b
4/16	GDP(前年比)	1Q	18.5%	18.3%	6.5%
4/16	鉱工業生産(年初来/前年比)	3月	26.5%	24.5%	35.1%
4/16	小売売上高(年初来/前年比)	3月	31.7%	33.9%	33.8%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3150 ~ 1.3500
SGD/JPY 81.00 ~ 84.00

アジア・オセアニア資金部 成田 隼基

■ 先月の為替相場

2021年04月のシンガポールドル(SGD)相場は、SGD高が進行。

月初よりSGDはじり高に推移。米金利低下、米株上昇を受けてリスク心理が改善。アジア株の上昇を背景に、堅調推移となった。こうした動きに加え、7日に発表されたIMFによる2021年の世界成長率が上方修正されたことも新興国通貨をサポート。月初1.34台で推移していたUSD/SGDは、1.33台後半の水準までSGD高が進行。

その後後半ばにかけて、USD/SGDは狭いレンジ内推移を継続。14日、半期に一度のMAS会合が実施されたが、MASは金融政策の維持を決定。同時に発表されたシンガポール第1四半期GDPが予想外のプラスとなり、通年の経済成長率についても事前予想の4-6%成長から上振れる可能性を示唆。これを受けてUSD/SGDは1.33台前半の水準までSGD高が進行した。

その後も、月末にかけてSGDは堅調に推移。Covid-19のワクチン確保の報道や米株が堅調推移となる中、新興国通貨に追い風となった。20日に一時1.33台割れの水準までSGD高が進行していたUSD/SGDは22日、バイデン政権による富裕層向け増税の可能性が報じられ米株安となる場面で再び1.33台を回復させたが、その後は再びSGD高方向に推移。結局、1.32台後半の水準にて越月となった。

■ 今月の見通し

2021年05月のSGD相場は、SGD高の進行を予想。

今月実施されたMAS会合(4月14日)以降、USD/SGDは1.34台から1.32台の水準まで大幅にSGD高が進行。MASは今回、前回のガイダンスで用いられていた「しばらくの間」という表現を削除した上で、「政策の緩和は引き続き適切である」というハト派的なスタンスを維持した。

MASの次の動きとしては金融引き締めの方に動く可能性が高いが、「まずは財政政策が重要」というMASのスタンスが今回もまた維持されたことから、金融政策の変更は年内は行われず、来年4月以降となることを予想する。

SGDはUSDのトレンドに左右される傾向が高いものの、実際のSGDのパフォーマンスを評価するためには、バスケット内の構成を見る必要がある。具体的には、ユーロ、中国元、マレーシアリングギット等がバスケット内でのシェアが高く、これらの通貨がUSDに対しどのように動くか、もまた見通しを考える上で重要となる。

足元のSGDはUSDに対し堅調に推移しており、5月についても同トレンドが維持することを予想。SGDはUSD安につれ、USD/SGD=1.31のサポートを試す可能性も十分にあるものの、2022年以降の「テーバリング」の可能性を見込むUSD買い需要の高まりや、米中リスクの高まりを受けたSGD安(人民元に連れ安)が年後半にかけて進む可能性も十分に考えられる。構成各国の動向もまた、併せて注視したい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の有名待ち合わせスポット』

【シンガポールの有名待ち合わせスポット】

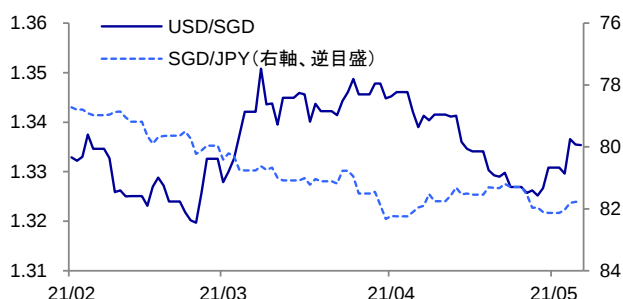
シンガポールに来て、はや三年が経とうとしておりますが、正直待ち合わせスポットというものがあるのか、未だに把握しておりません。というのも、人と、待ち合わせをして出かけるという行動パターンをすることが基本無いのです。タクシー代が安い国なので、現地集合、現地解散が基本となっている人が多いのではと思います。そして、住所さえ調べておけば、大きなビルの中でも、何となく場所を特定しやすいです。どのテナントも看板に#01-123のような格好で、確りとビルの何階のどのあたりなのか、というところまで住所によって明記されています。この部屋番号のような部分まで確認しておけば、初めて行く場所でも、大きく外すことはありません。この住所表記と明記のコラボレーションは、極めて合理的なシステムだと感じた次第です。

と言うわけで、待ち合わせスポットの話から逸れてしまいましたが、個人的な感覚としては、待ち合わせる必要の無い国であると感じております。そもそも、携帯電話が普及して以降、所謂待ち合わせスポットというものの価値そのものが低下したのではないかという議論もあるかと思えます。もともと、私が歳を取ったのか、若しくは友達が少なくなったのか、誰かとどこかで待ち合わせをして何かをする、という行為自体から遠ざかっている可能性は否めませんが。。。

(アジア・オセアニア資金部 田才)

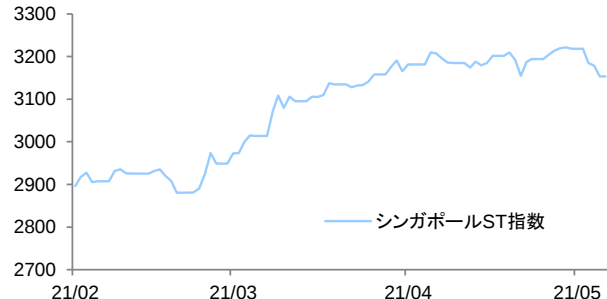
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/5	購買部景気指数	3月	50.9	50.8	50.5
4/5	小売売上高(前年比)	2月	6.5%	5.2%	-6.1%
4/14	MAS				
4/14	第1四半期GDP(速報値)	1Q	-0.5%	0.2%	-2.4%
4/16	非石油地場輸出(前年比)	3月	2.6%	12.1%	4.2%
4/23	CPI(前年比)	3月	1.2%	1.3%	0.7%
4/26	鉱工業生産(前年比)	3月	4.7%	7.6%	16.4%

タイバーツ相場

予想レンジ: USD/THB 31.10 ~ 32.00
THB/JPY 3.40 ~ 3.52

アジア・オセアニア資金部 バンコック室 鈴木 一勲

■ 先月の為替相場

4月は3月に続いてドルバーツが年初来高値を更新。31.20台で取引を開始し、月初はイースター休暇やタイの祝日が重なって取引が薄い中、強い結果となった米3月雇用統計によりドル高となり31.30台へ。加えて、タイ国内で発生した感染第3波への警戒感からドルバーツは9日に一時31.50台を示現。タイ中銀総裁をはじめ当局要人からタイ経済の下振れリスクが言及されたこともドルバーツの堅調推移をサポートした。

中旬、ソンクラン休暇のある週に入り、連休を前にタイ国内の新規感染者数の増加が止まらない中、12日には再び上値トライの動きが確認されたが、連休前までにバーツ売りは持続せず。しかし、13日には低下基調だった米債利回りが一時反発を見せたことで流動性が低下したためか、31.60近辺まで上昇。その後、反発を見せた米債利回りが再び低下基調を示すと、早いピッチでドルバーツは下落。15日には約2週間ぶりのドル安バーツ高水準である31.10台をつけた。ソンクラン休暇明けの取引では、予想を下回った中国1Q GDPや世界的に新型コロナの新規感染増加が懸念される状況に広く株安となり、センチメント悪化からドルバーツは31.30台を回復。

下旬、引き続きバーツ安地合いが続く中、23日に発表されたタイ4月商務省貿易統計にて、輸出の伸びが過去最高を記録。一時バーツが買われたが、タイのコロナ新規感染者が1日当たり2千人超と過去最高を記録すると、直ぐにバーツ安に転じた。月末週の序盤は日米中銀のイベントやバイデン大統領の演説を予定していたため、イベント前で上値、下値共に限定的。28日のFOMCでは金融政策の変更が無かったものの、パウエル議長がインフレ進行が一過性と明言したため、市場は米金利低下・ドル安で反応。29日は朝方からドルバーツが下落、バイデン大統領の演説も無難に通過し、日中は31.20台で推移。

■ 今月の見通し

ここまでドルバーツの上昇を牽引して来た米金利の上昇は、パウエル議長やFRB当局者の発言がハト派だったことから一服したもの、良好な米経済指標や着実に進むワクチン接種がドル高要因となり、一方のタイが此処に来て感染第3波に見舞われ、未だワクチン接種も進まないことがバーツ売り要因となって、昨年10月以来のバーツ安水準に達した。

5月のドルバーツ相場は引き続きドル高、バーツ安シナリオがメインだと考える。再三にわたり、米当局者からは金融政策を現状維持するとのメッセージが出ているが、商品市況に目を向けると、銅をはじめとした非鉄金属、鉄鉱石、住宅価格の上昇を裏付ける木材価格の上昇と幅広い商品価格が上昇基調を維持している。そのため、市場参加者がどうしてもFRBの出口戦略の時期を意識してしまい、パウエル議長は米金利上昇が一過性だと明言しているものの、結果としてリフレトレードが活発化して米債利回りが再び上昇していくようならば、ドルバーツのサポート要因となるだろう。タイに目を向けてみても、まだ国内を襲う感染第3波が収まる様子もなく、経済活動が停滞することから、2021年の経済成長率引下げが相次いでおり、こちらもバーツにとってはネガティブ要素。ただし、心理的節目の32を上抜けるまでのバーツ安になるかという点、FRBがハト派スタンスを継続するという前提がある以上は、ドルの上昇も限定的だろう。過去の推移から見るに、31バーツ後半での滞在期間が長くないうえ、5月は「Sell in May」と言われ株式が売られ易い月であることから、ドルバーツは不安定な動きとなるだろうが、上記の通り基本路線としてはドル高・バーツ安を想定。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の有名待ち合わせスポット』

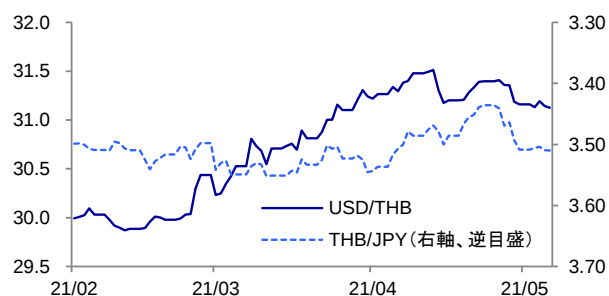
バンコクの有名待ち合わせスポットといえば、当地の百貨店がそれにあたるのではないのでしょうか。個人的にはサイアムパラゴン、エムクオーティエ、エンポリアムの3店がアクセスしやすく待ち合わせスポットになりやすいのではないかと思います。中でもサイアムパラゴンが最も指定されやすいのではないのでしょうか。

サイアムパラゴンはバンコクの商業中心地であるサイアム駅に直結しており、年齢別、性別で見ても幅広い客層が訪れていて、東京で言う銀座三越前や渋谷ハチ公前、新宿東口ロータリーという主要待ち合わせスポットを混ぜたような印象です。もちろん、日本の百貨店のように有名ブランドも数多く入店していますが、何と映画館や水族館まで入っています(加えてオールスロイス、ペトトレーのような超高級車も売っています)。食事を取るにしても、高級料理からお手頃ローカルフードが食べられるフードコートまで幅広いジャンルから選ぶことができ、買い物に特化した日本の百貨店とは違って、エンターテイメント要素が強いです。内装も凝っているため、写真大好きなタイの人々がウィンドウショッピングがてら自撮りしている様子を良く目にします。

今は外国人観光客が激減しておりますが、コロナ禍が終息した際には世界中の観光客が訪れ、より一層待ち合わせスポットとして賑わうのではないかと思います。

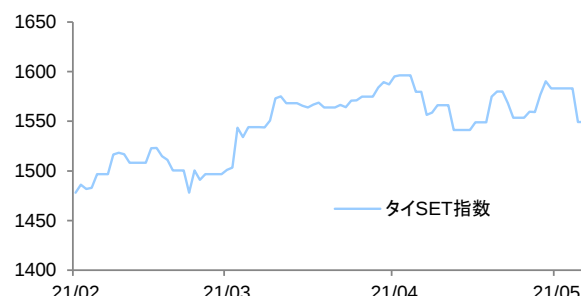
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/1	製造業PMI	3月	-	48.8	47.2
4/5	CPI (前年比)	3月	0.21%	-0.08%	-1.17%
4/23	輸出(通関ベース/前年比)	3月	-1.50%	8.47%	-2.59%
4/23	輸入(通関ベース/前年比)	3月	3.40%	14.12%	21.99%
4/23	経常収支(通関ベース)	3月	\$775m	\$711m	\$7m
4/27	新車販売台数	3月	-	74,295	58,960

マレーシアリング相場

予想レンジ:	USD/MYR	4.0500	～	4.1500
	MYR/JPY	26.32	～	27.03
	JPY/MYR	3.7000	～	3.8000

マレーシアみずほ銀行 内田 暁

■ 先月の為替相場

4月のリングgit相場は堅調に推移した。約5か月ぶりの安値圏4.15から、4.09までじりじりと水準を切り上げた。米長期金利上昇が一服感を示したことでドルが軟調に推移したことや堅調な原油相場が下支えとなった。また、3末にマレーシア中銀がFinancial Exchange Policy (外国為替管理規則)の見直しを発表。規制緩和によりグローバルサプライチェーンにおけるマレーシア地位向上や海外直接投資の増加が意識されたこともリングgitの支援材料となったことで、先月1ヵ月でリングgitは4.15から4.10まで上昇した。

上旬は2日に発表された米3月雇用統計が市場予想を大幅に上振れるとドル金利は上昇し、米10年債利回りで一時的に1.73%を付けた。その後はドル金利の上昇一服感の中、翌日発表の米3月非製造業ISMが97年統計開始以来の高値を記録。製造業に続きコロナでダメージを受けたサービス業の業況と新規受注の盛り返しが確認されたことでリスクオンの株高となったがドル金利は低下。ドル売りの流れでドル円が節目の110円を割り込む中、リングgitも買戻しが優勢となった。

中旬には原油相場の堅調を背景にリングgitは底堅く推移。14日にIEA(国際エネルギー機関)が発表した月報で21年の世界需要見通しが引き上げられ、北海プレントは3/18以来の65ドルを回復した。15日は中銀FEPの見直し発効日であったが、特段流動性の大きなインパクトもなく無難にクリアした。

下旬にかけては、リングgitは一段高となり節目の4.10を割れとなった。26日にワクチン接種に係る費用を国家信託基金から捻出することが発表されたが、ザフルル財務大臣がその説明の中で政府財政が逼迫し限界に近づいているとコメント。リングgit売り材料となり得たが、リングgit買いの流れは続き、節目の4.10を突破。また、28日のFOMCでパウエル議長がテーパリング時期に関して、引き続き暫く時間がかかるとの姿勢を貫いたことでドル金利は低下、ドル売りリングgit買いとなった。

■ 今月の見通し

今月のリングgit相場は引き続き外部環境に振られる展開が続くと見ている。米長期金利は、先月月初の米雇用統計発表後に10年利回りで1.73%を高値として徐々に切り下げる展開。リングgitは素直に反応する形でじり高となった。国内で新型コロナ感染者数が増加する中、インドでの急拡大を踏まえた、ワクチン供給不安が懸念される状況下でありながら、リングgit相場の底堅さを確認できたことは、今月の相場を見る上で一つの安心材料と言えよう。

今月もやはり米長期金利動向にはケアが必要だろう。先月は金利低下傾向が続き10年利回りで月初から約0.10%強低下。1.6%割れの水準まで来ているが、一段の下げ余地は限定的と見ており、リングgitの追い風は弱くなる方向を見ている。

国内イベントとして今月は5/6の中銀政策金利発表は押さえておきたい。前回3/4に続いて1.75%の据え置きを維持すると見られるが、今回は同時に公表されるステートメントに目を向けたい。直近3/23に発表されたCPIが2か月連続で上昇し、3月は前年比+1.7%を記録している。市場予想+1.6%に対しては若干の上振れであり、3月末に中銀が発表した年次報告書内でのインフレ見通し+2.5%～+4.5%にも到達していないものの、第1四半期の急回復ぶりを踏まえたステートメントの書き振りの変化に注目したい。

国内政治については、以前緊急事態宣言下の為、8/1まで事実上の議会招集は停止された状態が続いているが、与党第一党であるUMNOが緊急事態宣言下の議会再開を提案するなどの選挙戦を睨んだ各党の動きが見られ、8月上旬の総選挙が前倒しとなる機運が高まると国内政局を材料としたリングgit売りへの警戒が広がると見るが、国案でのコロナ感染者数高止まりの状況を踏まえると、夏場を前に大きな政局の動きは見込みづらい。

以上を踏まえると、今月のリングgit相場は、先月28日のFOMCを無事通過したことによって、束の間の適温相場、つまり緩やかなドル売りリングgit買いをメインシナリオとして見ている。

■ 今月のつづき(現地からの声)

『当地の有名待ち合わせスポット』
当地においては、待ち合わせを外で行うことが少ないように思われる。なぜならば暑いからだ。そんな中でも、あえて挙げるとすると、クアラルンプール随一の繁華街ブキビンタンにある、Lot10だろう。Lot10には、H&M他アパレルショップは元より、地下1階から地上4階まで伊勢丹が入っており、日本食材の購入、日本製品、衣服の購入も可能。日本食は、しゃぶしゃぶ、焼肉、天丼から、クレープまで食べれる。彦摩呂風に言うと、「日本食の玉手箱」状態である。

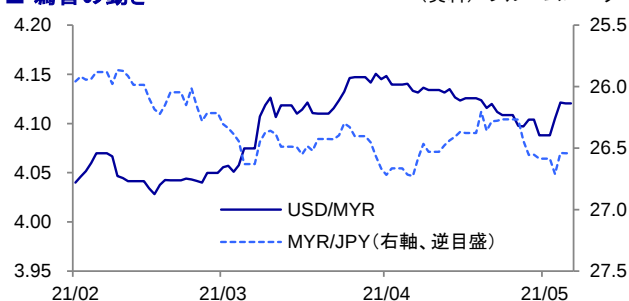
ちなみに、Lot10は1990年オープン。当時は一歩郊外に行けばジャングルで、周辺は赤線地帯(もはや死語!)だった当該地域の一角を再開発して出来たと言われていた。伊勢丹はオープン当初から進出しており、マーケットを切り開いた諸先輩方には同じ日本人として頭が下がる思いである。

さて、そんな老舗のLot10であるが、最近革命が起きた。日本ではおなじみ、「ドン・キホーテ」の出店である。シンガポールでは既にお馴染みとなっているようだが、ついにマレーシアにも「Jonetz by DonDonDonki」という名前で、2021年3月に開店した。日本と全く同じもの、特に化粧品やその他ドラッグストア関連商品について低価格で買えるようになったのは、中々日本に帰れない身としては有難いところ。また、一番力を入れているのは総菜類ということで、寿司・肉・日本製の野菜・果物も低価格で購入可能である。これにはローカルも飛びつき、土日は3時間待ちで、筆者はここまで熱く語っているものの、未だ入店できていない状況である…。

せめてと思ひ、Donkiの入り口にある「焼き芋」屋で焼き芋を買ったところ、日本と同じ味、甘さに涙が出そうになった。まだ当地では焼き芋はメジャーではないが、ローカルもきっと好きな味。この焼き芋屋が新たな待ち合わせスポットになりそうである。

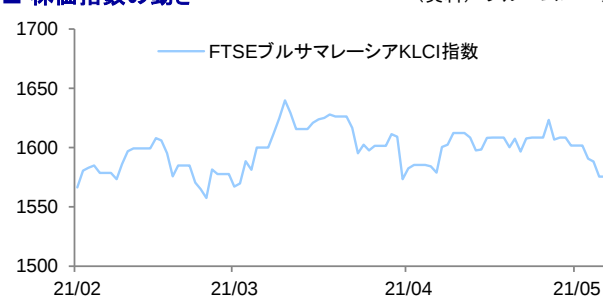
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/7	Foreign Reserves	31-Mar	-	\$108.6B	\$109.2B
4/9	Industrial Production	Feb	1.8%	1.5%	1.2%
4/22	Foreign Reserves	15-Apr		\$109.3B	\$108.6B
4/23	CPI	Mar	1.6%	1.7%	0.1%
4/28	Exports	Mar	22.9%	31.0%	17.6%
4/28	Imports	Mar	17.2%	19.20%	12.7%
4/28	Trade Balance	Mar	18.3B	24.1B	17.9B

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 14200 ~ 14600
 IDR/JPY 0.74 ~ 0.78
 JPY/IDR 128.21 ~ 135.14

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 田才 雄

■ 先月の為替相場

4月のドルルピアは、方向感無く推移した。ドルルピアは月初1日14500台半ばで取引を開始。前月からのルピア安の流れは変わらず、一時14600を示現した。翌週5日以降も、14500台を中心にルピアは安値圏での推移が続く中、インドネシア中銀ドディ副総裁から、「ルピアは対ドルで安すぎる、ファンダメンタルズを反映していない」とルピア安をけん制。米金利が低下する中、7日には一時14500割れまでルピアは反発したが、その後はルピア安の展開に。8日、9日と再び14600手前までルピア安となる中、ペリー中銀総裁からは「米金利上昇に伴ったルピア安となったものの、レートは安定していると考えている」と発言があり、ルピア安に対する警戒感が滲み出た。翌週12日もルピアはじり安となり14600台前半で推移。15日はインドネシア3月貿易収支が発表され、1.5億ドル超と引き続き大きな黒字を記録した。輸出入の前年同月比はそれぞれ30.47%増と25.73%増となりそれぞれ大きく伸びた中で、貿易黒字であったが、ルピア安の流れは続き、4月の安値圏となる14600台半ばで推移。しかしその後は、米金利の調整局面が続く中、ルピア安も一服し、週末16日にかけて14500台までルピアは反発した。翌週20日に発表されたインドネシア中銀政策決定会合結果は、主要政策金利である7日物リバースレポレートは3.50%で据え置きと、市場予想結果通りとなった為、為替への影響は限定的に留まった。その後は材料難の中、14500台での小動きが続いた。翌週26日以降も月末が近づき、ドル買い需要が増していく中ではあったが、ルピアは14500を挟んで小動きが続いた。しかし、28日に米FOMCの結果を受けた米金利低下とドル安進行により翌29日のドルルピアは14400台半ばまでルピアが堅調に推移した。(30日 日中時点)

■ 今月の見通し

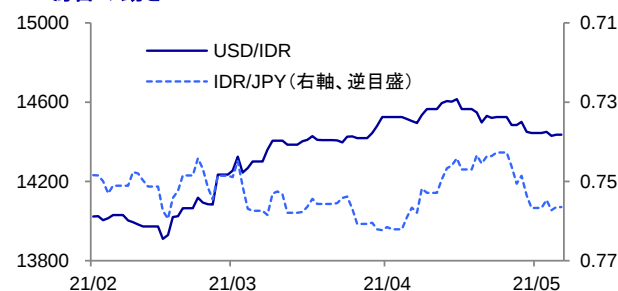
5月のドルルピアは、ルピアの底堅い推移を予想する。4月は米金利が調整局面となり、2月半ばから続いたルピア安も一服。先月の米FOMCからも、米金利上昇再開はもう少し先の事となりそう。インドネシア10年物国債からの資金流出が続いていたが、現在の米金利環境を踏まえると、再び証券投資が戻ってくることが想定される。更なるルピア安についても先送りと捉えて差支えないのではないかと。また、3月も引き続き貿易収支は大きく黒字を計上した。3月は、2月に続いて輸入が前年同月比でプラス。プラス幅も更に大きくなった。同時に輸出も大きく回復しており、輸入が回復する中でも大きな黒字となった格好。経常赤字削減の原動力は健在だ。インドネシア国内のコロナウイルス感染状況やワクチン接種の進展は世界的に見ればビハインドしていることは否めず、国外経済の回復に伴う輸出増の影響はもう暫く、貿易黒字をもたらす、ルピアのサポート材料として引き続き作用するだろう。但し、懸念が無いわけではない。新興国におけるコロナウイルス感染終息はどうしても先進国に比べて遅れをとっている。特に足元インドの感染状況は報道でもある通り、極めて厳しい。結果的にインドルピーは軟調な推移となっている。同様の事がインドネシアで起きないとは断言できず、寧ろ、そうしたリスクは比較的大きい国だろう。引き続きコロナウイルスに関わる国内の状況は注視する必要がある。一方でコロナウイルス感染状況が悪化しない場合においては、貿易収支黒字を徐々に縮小させていく可能性を孕む。ルピアのサポート材料も少しずつ剥落していく点は長い目線では忘れてはならないポイントだろう。以上よりメインシナリオとしては、今月のドルルピアは、ルピアの底堅い推移を予想したい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

大変恐縮なのですが、諸般の事情により、暫くの間休載とさせていただきます。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
4/1	CPI (前年同月比)	3月	1.44%	1.21%	1.53%
4/7	外貨準備高(USD B)	3月	-	137.1	138.8
4/15	貿易収支(USD M)	3月	1600	1560	1991
4/15	輸出 (前年比)	3月	12.23%	30.47%	8.50%
4/15	輸入 (前年比)	3月	7.16%	25.73%	14.87%
4/20	BI 7days リバースレポ金利	-	3.50%	3.50%	3.50%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 47.50 ~ 48.85
PHP/JPY 2.23 ~ 2.30

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 樋上 陽一

■ 先月の為替相場

イースター休暇明け、月初(5日)は3月末終値と同水準の1米ドル＝48.55ペソで出合った。

マニラ首都圏と近隣4州の外出制限強化に対するネガティブな反応は見られなかったが、米雇用統計を受けてドルは底固くなり、8日に一時1米ドル＝48.66ペソで取引され、これが月のドル高値となった。

アジア域内のCOVID19感染拡大が懸念されたことなどアジア通貨が対ドルで弱含む局面もあったが、米ドル金利が再び低下したことや、S&P500、ダウ平均の両株価指数がともに史上最高値を更新したことことからリスクオン地場でペソはしっかり。

加えて実需の大口ペソ買いフローもあり、20日には1米ドル＝48.27ペソで取引された。

その後、月末に向けては1米ドル＝48.35～48.45ペソをコアレンジとして方向感を探る展開が続いたが、FOMC、パウエルFRB議長の記者会見後に緩和的な米ドルの金融政策の長期化が意識されたことから月末にペソ高が進んだ。

4月30日10時現在、2月16日以来のペソ高値水準である1米ドル＝48.15ペソレベルで取引されている。

■ 今月の見通し

まずは先月発表された経済指標を整理すると、2月海外在留フィリピン人労働者(OFW)送金は24.8億ドルとなり、前年同月比で5.1%増となったが前月の26億ドルからは減少。原油価格(WTI)は約1ヶ月半ぶりの高値水準となる1バレル＝65ドル台。OFWの減少は市場のドル売り圧力減少、原油価格の上昇は輸入増に繋がるためペソ売り材料。

2月貿易収支は、赤字額が市場予想の21.7億ドルから22.9億ドルに拡大したもの、前月の28.7億ドルからは縮小した。また3月の消費者物価は前年比4.5%となり、前月の同4.7%、市場予想の同4.9%と比べてやや鈍化。こちらは構造的なドル買い圧力の緩和と過度なインフレ懸念の後退はペソ買い材料。

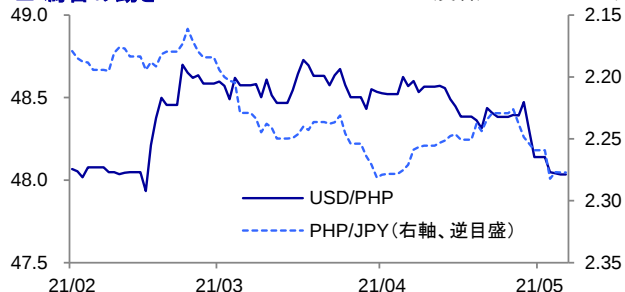
史上高値圏で推移する米株だが、フィリピン株式指数(PSEi)については年初から右肩下がり。23日は終値ベースで1ヶ月ぶりに年初来安値を更新して6378.07ポイントで取引を終え、年初に記録した高値7432.40ポイントから14%超下落した。

水準感で為替相場をみると東南アジア通貨の年初来の対ドルパフォーマンスにおいてフィリピンペソは0.8%安となっている。タイバーツが4%超、インドネシアルピアは3%超、インドルピー、マレーシアリンギットも2%超の通貨安であることからペソの上値は重そう。一方、為替市場で取引されるアジア通貨の対ドルでの強弱を表したアジア通貨インデックスは年初から0.8%前後の下落で、こちらはフィリピンペソと同水準であることからペソ高が進んでいるとは言えない。

ペソの動向についてはこれまで米ドル金利の動きに注目していたが、今後は米株式市場の値動きに注目。トレンドとして史上最高値を更新していく値動きとなりそう。リスクオンからのペソ高がイメージしやすい。とはいえ、リスクセンチメントだけでペソを買うには材料不足感は否めず、米株のトレンドが変化した場合、これまで売られていなかった分だけペソ安余地は大きいともいえる。

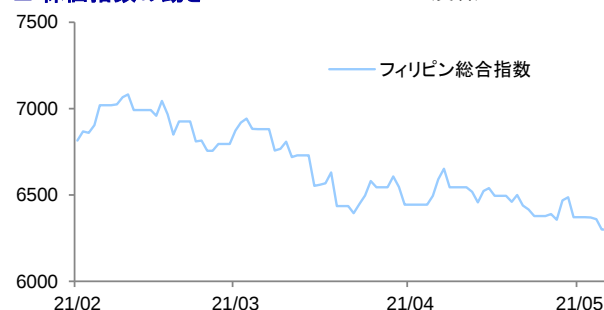
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記参照

(資料) ブルームバーク

期間 予想 結果 前回

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 72.50 ~ 76.50
INR/JPY 1.43 ~ 1.51

アジア・オセアニア資金部 インド室 田川 順也

■ 先月の為替相場

【4月の米ドル/インドルピーは高値をつけた後やや調整となった】

3月末に米10年債利回りの上昇に伴って73台を上抜けたドル/ルピーは1日～4日まで連休を挟み5日に73.36で4月の取引をスタート、火曜日につけた73.205が当月の安値に。コロナ感染者増に伴い、金融都市ムンバイの属するマハラシュトラ州に夜間外出禁止令や週末の厳格閉鎖が発令されたことがルピーの重しに。また外国人投資家がインド株から資金を流出させていることもルピー売りを想起させた。その後インド中央銀行の金融政策会合で新たな債券購入プログラム(G-SAP)が発表され、併せてルピー売り材料に。

2週目に入るとコロナ感染者・死者数が一段と悪化。ドル/ルピーは月曜早々に大台75を上抜け。15日には当月高値となる75.34まで上昇。ただし、同水準では中銀の為替介入(ドル売り/ルピー買い)が出ているとの観測に一旦74台前半まで押し戻される展開。なお、マハラシュトラ・ラジャスタン州の2州がロックダウン入り。

3週目に入っても止まらない感染者増で月曜午前にはデリーもロックダウンを発表。このタイミングで再度75台を示現。ドルインデックスが7週間ぶり安値近辺となるとアジア通貨全般が浮上したが、ルピーはアンダーパフォーム。5月以降にワクチンを18歳以上に開放するとの報道があったものの、そもそもワクチン不足が叫ばれている中、為替・株式共に材料視せず。この週に日次感染者数は30万人を突破。オフショアNDFで1か月物が76をつけに行く展開に再度15日につけた高値近辺まで上昇するも為替介入に押し戻される。

4週目には酸素不足や医療崩壊が報道され続ける。一方で米投資ファンドブラックストーンが印ソフトウェア企業の株式について概算で11億ドル分となる26%を取得すると発表。また印食品デリバリー大手が最大で825億ルピー(11.1億ドル)の新規株式公開についての草案を規制当局に提出したとの報道にいずれも海外資金流入が期待されルピー買い材料に。74.36で29日取引を終了した。

■ 今月の見通し

【5月の米ドル/インドルピーは底堅い展開を予想】

既述のようにインドのコロナ第2波は昨年度とは比べられないほど悪化、デリー・ムンバイという二大都市もロックダウン。酸素ボンベが闇市場において高値で取引され、病床は不足し文字通りの医療崩壊、火葬場が足りず公園などで焼いている状況。米系大手銀行や地場大手銀行は今年度のGDP予想を急落の下方修正。格付け大手フィッチやS&Pも格下げには至っていないものの、成長率見通しの下振れに懸念を表明。強いルピー売り材料となっている。

これに抗うルピー買い材料がいくつかあり、まずは中銀のドル売り介入である。為替相場の急激な変動を嫌うインド中央銀行はドル売り/ルピー買い介入(昨年とは介入の方向が逆である点には注意)を行い、ボラティリティの抑え込みを企図している。75を超えたところから介入が入り、75.30レベルではかなりしっかり売っていたのが4月の状況。これを見たトレーダーたちは積極的にドル/ルピーを買い集めてはおらず、buy on dip(下がれば買う)といった様相で、高値圏で買い上げていく勢いは今のところ見られない。次に株式市場絡みの資金流入フローである。コロナを背景とした景気減速懸念は資金流出を生んだが、一方でIPOや出資は衰え知らずで発表のたびに資金流入を呼び、ドル売り/ルピー買いフローとなっている。

また外部要因では3月末を天井にドルインデックスが下落している点にも注意が必要である。ドル安に伴ってアジア通貨インデックスは反転、2月末水準まで回復している。

5月の予想のベースはドル/ルピーの上昇を想定しているが、これらの要因を考えると上昇一辺倒というよりも底堅いという表現にしたい。

ルピー/円にもリスクがあり、ドル安進行に伴ってドル/円が円高、ただしドル/ルピーはコロナを背景にルピー安進行というシナリオの組み合わせになってしまうとルピー/円は急激な円高も視野に入る。例えば、ドル/円が107.50円でドル/ルピーが75.00だとルピー/円は1.43である。3月末にルピー/円は1.516をつけていただけにこちらも注意が必要だ。

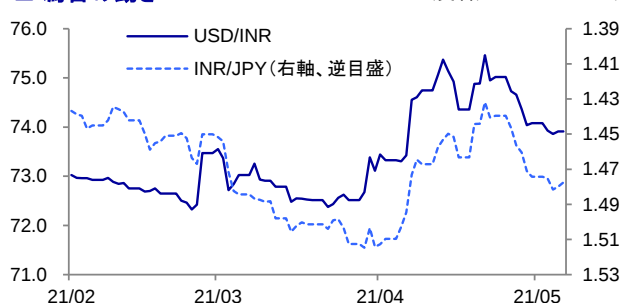
■ 今月のつづやき(現地からの声)

『当地の有名待ち合わせスポット』

報道でご覧の通り、インドでは再び新型コロナウイルスの感染が拡大、行動は厳しく管理され外出が簡単に叶う状況にありません。パンデミック前のお話になりますが、目的無く街をぶらぶらするときなど、人々の待ち合わせでよく使われるのは『映画館』前ではないでしょうか。エンターテインメントが豊富ではないインドには各都市それぞれに古くから存在するクラシックな映画館もあれば、最新の設備を備えた高級なシネマコンプレックスなど、国民的娯楽を楽しむ映画館が人々になじみのある場所なのだと思います。(バンガロール 長谷川)

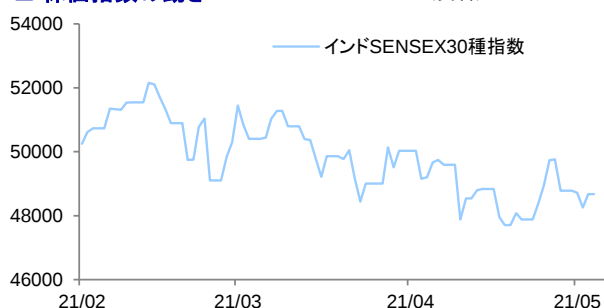
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
4/5	製造業PMI
4/7	政策金利
4/12	CPI
4/12	鉱工業生産
4/15	貿易収支

(資料) ブルームバーク

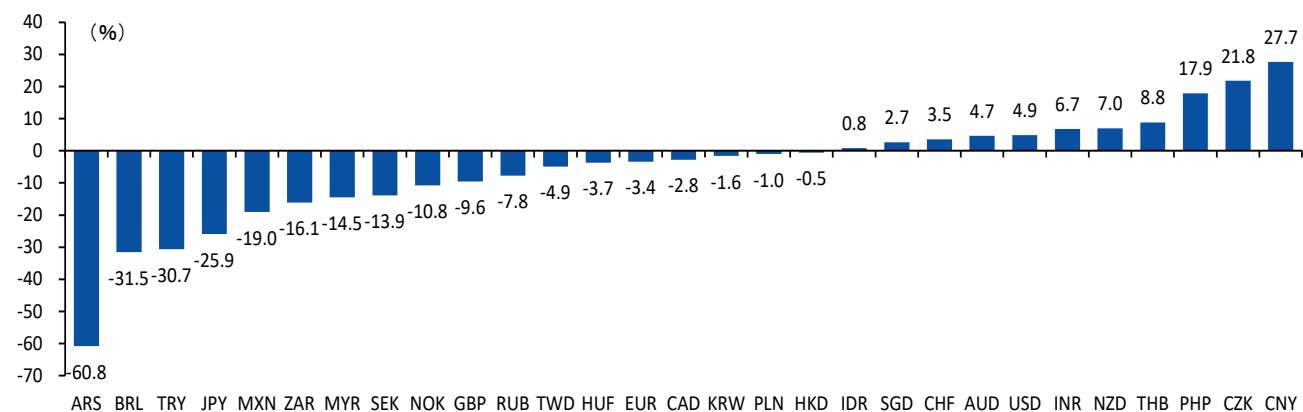
期間	予想	結果	前回
3月	-	55.4	57.5
-	4.00%	4.00%	4.00%
3月	5.40%	5.52%	5.03%
2月	-3.0%	-3.6%	-1.6%
3月	-141億ドル	-139億ドル	-126億ドル

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2020年末	2021年4月末	騰落率	株式市場	2020年末	2021年4月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	30606.48	33874.85	10.7%	-
日本	USD/JPY	103.25	109.31	5.9%	日経平均株価	27444.17	28812.63	5.0%	-0.8%
ユーロ圏	EUR/USD	1.2216	1.202	-1.6%	ドイツDAX指数	13718.78	15135.91	10.3%	10.3%
英国	GBP/USD	1.367	1.3822	1.1%	ロンドンFTSE100指数	6460.52	6969.81	7.9%	6.7%
豪州	AUD/USD	0.7694	0.7716	0.3%	S&P/ASX200指数	6587.096	7025.817	6.7%	6.4%
カナダ	USD/CAD	1.2725	1.2287	-3.4%	S&Pトント総合指数	17433.36	19108.33	9.6%	13.5%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.5272	6.4749	-0.8%	上海総合	3473.069	3446.856	-0.8%	0.0%
香港	USD/HKD	7.7531	7.7675	0.2%	香港ハンセン	27231.13	28724.88	5.5%	5.3%
インド	USD/INR	73.07	74.0788	1.4%	インドSENSEX30種	47751.33	48782.36	2.2%	0.8%
インドネシア	USD/IDR	14050	14445	2.8%	ジャカルタ総合	5979.073	5995.616	0.3%	-2.5%
韓国	USD/KRW	1086.51	1112.31	2.4%	韓国総合株価	2873.47	3147.86	9.5%	7.0%
マレーシア	USD/MYR	4.0203	4.088	1.7%	ブルサマレーシアKLCI	1627.21	1601.65	-1.6%	-3.2%
フィリピン	USD/PHP	48.03	48.14	0.2%	フィリピン総合	7139.71	6370.87	-10.8%	-11.0%
シンガポール	USD/SGD	1.3221	1.3308	0.7%	シンガポールST	2843.81	3218.27	13.2%	12.4%
台湾	USD/TWD	28.094	27.902	-0.7%	台湾加権	14732.53	17566.66	19.2%	20.1%
タイ	USD/THB	29.959	31.16	4.0%	タイSET	1449.35	1583.13	9.2%	5.0%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2021年3月時点)



■ 実質GDP成長率

	2019Q3	2019Q4	2020Q1	2020Q2	2020Q3	2020Q4	2021Q1	2019	2020
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	2.6	2.4	-5.0	-31.4	33.4	4.3	6.4	2.2	-3.5
日本*	0.7	-7.2	-2.2	-29.3	22.8	11.7		0.3	-4.9
ユーロ圏	1.4	1.0	-3.3	-14.6	-4.1	-4.9	-1.8	1.3	-6.6
英国	1.4	1.2	-2.2	-21.4	-8.5	-7.3		1.4	-9.8
豪州	1.9	2.2	1.4	-6.3	-3.7	-1.1		1.9	-2.4
カナダ*	1.8	0.4	-7.5	-38.5	40.6	9.6		1.9	-5.4
エマージングアジア									
中国	5.9	5.8	-6.8	3.2	4.9	6.5	18.3	6.0	2.3
香港	-2.8	-3.0	-9.1	-9.0	-3.6	-2.8	7.8	-1.2	-6.1
インド	4.6	3.3	3.0	-24.4	-7.4	0.4		8.3	6.8
インドネシア	5.0	5.0	3.0	-5.3	-3.5	-2.2	-0.7	5.0	-2.0
韓国	2.0	2.3	1.4	-2.7	-1.1	-1.2	1.8	2.0	-1.0
マレーシア	4.4	3.6	0.7	-17.1	-2.6	-3.4		4.3	-5.6
フィリピン	6.3	6.7	-0.7	-16.9	-11.4	-8.3		6.0	-9.5
シンガポール	1.1	1.3	0.0	-13.3	-5.8	-2.4	0.2	1.4	-5.4
台湾	3.3	3.7	2.5	0.4	4.3	5.1	8.2	3.0	3.1
タイ	2.7	1.3	-2.1	-12.1	-6.4	-4.2		2.3	-6.1

(注)インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	20/08	20/09	20/10	20/11	20/12	21/01	21/02	21/03	2019	2020
	(%)								(%)	
先進国										
米国	8.4	7.8	6.9	6.7	6.7	6.3	6.2	6.0	3.7	8.1
日本	3.0	3.0	3.1	3.0	3.0	2.9	2.9	2.6	2.4	2.8
ユーロ圏	8.7	8.7	8.5	8.3	8.2	8.2	8.2	8.1	7.6	8.0
英国	4.5	4.8	4.9	5.0	5.1	5.0	4.9		3.8	4.4
豪州	6.8	6.9	7.0	6.8	6.6	6.3	5.8	5.6	5.2	6.5
カナダ	10.2	9.2	9.0	8.6	8.8	9.4	8.2	7.5	5.7	9.6
エマージングアジア										
中国		4.2			4.2				3.6	4.0
香港	6.1	6.4	6.4	6.3	6.6	7.0	7.2	6.8	2.9	5.5
インドネシア	7.1								5.1	6.0
韓国	3.3	4.0	4.2	4.2	4.5	5.4	4.0	3.9	3.8	4.0
マレーシア	4.7	4.6	4.7	4.8	4.8	4.9	4.8		3.3	4.5
フィリピン			8.7						5.1	10.4
シンガポール		3.5			3.3				2.2	3.0
台湾	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.7	3.7	3.7	3.9
タイ	1.9	1.8	2.1	2.0	1.5				1.0	1.6

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	20/08	20/09	20/10	20/11	20/12	21/01	21/02	21/03	21/04	2019	2020
	(前年比%)									(前年比%)	
先進国											
米国	1.3	1.4	1.2	1.2	1.4	1.4	1.7	2.6		1.8	1.2
日本	0.2		-0.4	-0.9	-1.2	-0.6	-0.4	-0.2		0.5	0.0
ユーロ圏	-0.2	-0.3	-0.3	-0.3	-0.3	0.9	0.9	1.3	1.6	1.2	0.3
英国	0.2	0.5	0.7	0.3	0.6	0.7	0.4	0.7		1.8	0.9
豪州		0.7			0.9			1.1		1.6	0.9
カナダ	0.1	0.5	0.7	1.0	0.7	1.0	1.1	2.2		1.9	0.7
エマージングアジア											
中国	2.4	1.7	0.5	-0.5	0.2	-0.3	-0.2	0.4		2.9	2.5
香港	-0.4	-2.2	-0.2	-0.2	-0.7	1.9	0.3	0.5		2.9	0.3
インド	6.7	7.3	7.6	6.9	4.6	4.1	5.0	5.5		3.7	6.6
インドネシア	1.3	1.4	1.4	1.6	1.7	1.6	1.4	1.4	1.4	2.8	2.0
韓国	0.7	1.0	0.1	0.6	0.5	0.6	1.1	1.5	2.3	0.4	0.5
マレーシア	-1.4	-1.4	-1.5	-1.7	-1.4	-0.2	0.1	1.7		0.7	-1.1
フィリピン	2.4	2.3	2.5	3.3	3.5	4.2	4.7	4.5	4.5	2.5	2.6
シンガポール	-0.4	0.0	-0.2	-0.1	0.0	0.2	0.7	1.3		0.6	-0.2
台湾	-0.3	-0.6	-0.3	0.1	0.1	-0.2	1.4	1.3		0.6	-0.2
タイ	-0.5	-0.7	-0.5	-0.4	-0.3	-0.3	-1.2	-0.1	3.4	0.7	-0.8

(注)豪州は四半期データ。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2019Q2	2019Q3	2019Q4	2020Q1	2020Q2	2020Q3	2020Q4	2019	2020
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-2.4	-2.4	-2.2	-2.2	-2.6	-2.7	-3.0	-2.2	-3.1
日本	3.4	3.3	3.4	3.4	2.9	2.9	3.3	3.4	
ユーロ圏	2.3	2.3	2.3	2.0	2.2	2.0	2.2	2.3	2.2
英国	-4.4	-4.4	-3.1	-2.4	-2.3	-2.2	-3.5	-3.1	
豪州	-0.8	0.2	0.7	1.2	1.8	2.0	2.6	0.7	
カナダ	-2.3	-2.3	-2.1	-2.0	-2.1	-2.0	-1.9	-2.1	-1.9
エマージングアジア									
中国	0.8	0.9	0.7	0.3	0.9	1.3	1.8	0.7	
香港	4.8	5.7	6.0	4.8	6.0	7.0	6.6	6.0	
インド	-2.1	-1.6	-1.0	-0.8	0.4	1.3	1.3	-1.0	1.3
インドネシア	-3.0	-2.9	-2.7	-2.4	-2.1	-1.3	-0.5	-2.7	-0.5
韓国	4.3	3.8	3.7	3.8	3.6	3.8	4.4	3.7	
マレーシア	3.1	3.6	3.3	2.8	2.5	3.5	4.4	3.3	
フィリピン	-1.5	-1.0	-0.1	0.4	1.5	2.6	3.5	-0.1	
シンガポール	16.1	14.8	14.3	14.8	15.6	16.8	17.6	14.3	17.6
台湾	10.9	11.3	10.6	10.4	10.7	12.8	13.9	10.6	13.9
タイ	5.0	6.1	7.0	6.7	6.3	5.7	3.3	7.0	

(注)インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在(%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準(%)	日付	変更幅	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	0.00-0.25	緩和: 2019/7/31	2.25-2.50	2020/3/15	-100bp	2021/4/28	現状維持
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10bp	2021/4/27	現状維持
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.00	緩和: 2011/11/3	1.50	2016/3/10	-5bp	2021/4/22	現状維持
英国	バンク・レート	0.10	緩和: 2020/3/11	0.75	2020/3/19	-15bp	2021/3/18	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	0.10	緩和: 2011/11/1	4.75	2020/11/3	-15bp	2021/4/6	現状維持
カナダ	翌日物金利	0.25	緩和: 2020/3/4	1.75	2020/3/27	-50bp	2021/4/21	現状維持
エマージングアジア								
中国	1年物貸出基準金利(LPR)	3.85	緩和: 2012/6/8	6.31	2020/4/20	-20bp	2021/4/1	現状維持
インド	翌日物レポ金利	4.00	緩和: 2019/2/7	6.50	2020/5/22	-40bp	2021/4/7	現状維持
インドネシア	7日物リバースレポレート	3.50	緩和: 2019/7/18	6.00	2021/2/18	-25bp	2021/4/20	現状維持
韓国	7日物レポ金利	0.50	緩和: 2019/7/18	1.75	2020/5/28	-25bp	2021/4/15	現状維持
マレーシア	翌日物金利	1.75	緩和: 2019/5/7	3.25	2020/7/7	-25bp	2021/3/4	現状維持
フィリピン	翌日物金利	2.00	緩和: 2019/5/9	4.75	2020/11/19	-25bp	2021/3/25	現状維持
タイ	翌日物レポ金利	0.50	緩和: 2019/8/7	1.75	2020/5/20	-25bp	2021/3/24	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	4.00	緩和: 2012/3/12	15.00	2020/10/1	-50bp	2020/10/1	-50bp

(注)インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利を8レートから7日物リバースレポレートに変更

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行